

豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ

# 高師

豊橋校区史

31

*Takashi*









# 高師

TAKASHI



「校区のあゆみ」



勝地高師山（高師小学校）※P18 参照

雲のみる梢はるかに霧をこめて  
たかしの山に鹿ぞ鳴くなる

右大臣実朝

## 「校区のあゆみ」



畑ヶ田町全影（左下雉ヶ城跡） 平成10年（1998）



畑ヶ田橋上流井堰（現在も取水されている）

「校区のあゆみ」



ユニチカから東方を見た昭和26年頃の風景（1951）



ユニチカから東方を見た現在の風景

# 「校区のあゆみ」

## 時代で見る 高師小学校

昭和42年～平成13年



昭和42、3年頃



昭和50年頃 (1975)



平成13年 (2001)

# 発刊によせて



平成18年度  
豊橋市総代会長

西 義 雄

このたび、豊橋市制施行100周年を記念し、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を発刊する運びとなりました。皆様のご協力により記念事業にすばらしい彩りを添えることができましたことを、心よりうれしく思います。

この事業は、100年の節目を契機に地域の歴史や文化、自然などを改めて見つめ直し、将来の夢に思いを馳せていただくものであり、51校区すべてが足並みを揃え発刊できたことに、たいへん大きな意義を感じています。また、各校区におきましては、編集委員を中心に多くの地域住民の皆さんが資料の収集や原稿の執筆などに携わられたことと思えます。こうした取組みを通し、地域の絆がさらに深まったものと考えています。

地域イベントの開催を含め「市民が主役」を合言葉に行政と協働で進めてきた100周年記念事業ですが、多くの地域住民の方々が様々な形で挙って参加できたことが何よりの成果であったと思います。今後におきましても、この100周年記念事業を一過性のものに終わらせるのではなく、次の100年に繋げていかなければならないと考えています。

最後に、本校区史の発刊にあたり、多大なご協力を頂いた多くの皆様に改めてお礼を申し上げます、ごあいさつとさせていただきます。



平成18年度  
高師校区総代会長

久保田 正

豊橋市制施行100周年記念は、高師校区として1906年に渥美郡高師村として現在の原型の高師校区が発足しています。高師校区にとっても100周年の記念すべき年でもあります。

梅田川を中心として紀元前より脈々とつづく歴史と素晴らしい伝統を培ってきた地域と先人の活躍をこの「校区史」で表すにはとても小さな本書ですが、目で見ても楽しく読めて「高師校区」が大きくご理解いただける冊子として作られました。

創立135年の高師小学校を中心とし発展してきた地域の「校区史」として編集するために多くの方々のご協力と資料の提供をいただきました。

30年前に「高師風土記」が発行されており、今回の編集の段階で収集された写真は8,000枚を超え、各種資料は膨大な量になり、それらは本書刊行だけではあまりにも貴重な資料となっています。今後、旧高師校区の地域の方々とともに「高師風土記」の改版につながればと願っています。

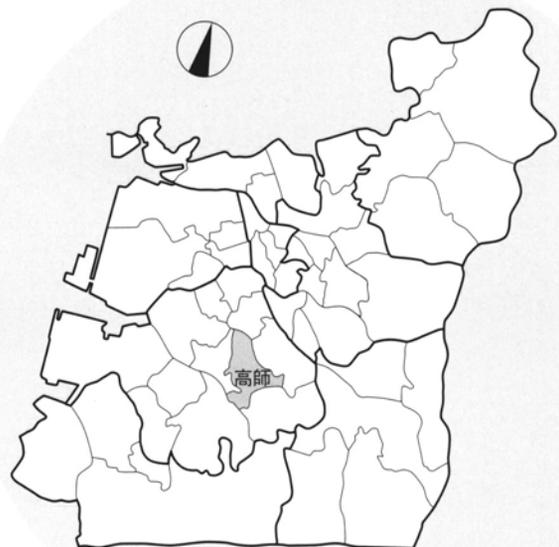
今回の「高師校区史」が単なる過去の記録にとどめるのではなく、新たな伝統の構築と高師の未来と発展の原動力となる事と思えます。編集委員としてご奮闘いただいた関係者の皆様にあらためて感謝申し上げますとともにとよはし100祭、たかし100祭に皆様がおよせ頂いた、ご協力、ご尽力に心よりお礼申し上げます。

# 目次

# CONTENTS

第1章 自然と環境	1 土地のようす	7
	(1) 位置	7
	(2) 地形と地質	7
	2 気候と災害	8
	(1) 気候	8
	(2) 竜巻被害	8
	3 校区の移り変わり	8
	(1) 地名の由来	9
	(2) 校区の変遷	9
	(3) 人口、戸数	11
第2章 歴史と生活	1 高師校区の歴史	13
	(1) 原始時代	13
	(2) 古代から中世	13
	(3) 江戸時代	15
	(4) 明治になって	15
	(5) 大正から昭和になって	17
	(6) 悲惨な戦争と高師	18
	(7) 戦後の高師	19
	2 産業の移り変わり	21
	(1) 農業	21
	(2) 工業	23
	(3) 商業、サービス	25
	3 伸び行く高師	26
	4 総代会と校区の活動	27
第3章 教育と文化	1 教育の充実	29
	(1) 高師小学校のあけぼの	29
	(2) 「現在地・上原」に移った高師小学校	31
	(3) 新制の小学校がスタート	33
	(4) 南部中から高師台中、そして本郷中学校	36
	(5) 幼児教育の充実	37
	(6) 社会教育の充実	37
	2 信仰と文化	38
	(1) 守り守られ—鎮守様	38
	(2) 先祖供養と、心のよりどころ—お寺さん	40
	(3) 郷土の人物探訪	41
	(4) 郷土に残る昔話	43
	(5) 昔のあそびとおもちゃ (温故知新)	44
参考文献		49
資料提供		50
編集後記		51

校区の位置



# 第1章 自然と環境

## 1 土地のようす

### (1) 位置

高師校区は、豊橋市の中心部からほぼ真南に位置し、JR豊橋駅より南へ約3～6kmの地点に校区の西側の境界があり、その境界から東方へ約2kmの間に広がる地域である。

校区には、主要な県道「小松原街道」が東側を、そして「野依街道」が西側を南北に通り、市の中心部に通じている。南側には東三河環状道路が東西方向に通じ抜け、豊橋港や国道1号線に通じている。

また、梅田川は、校区の南部を東から西に貫いて流れ三河湾に注ぐが、この川の中流域2km間が校区の広がりであり、この川によって校区は南北に分けられている。

### (2) 地形と地質

校区の地形を南から北へたどってみると、南部は畑ヶ田地区のある台地、そして低く流れる梅田川、その北側は水田や畑の低地が続

き、そして緩やかに高くなっていった住宅地のある高台へ続いている。

北部の高台は、高さ約30m以下の広大な台地、高師原台地の一部であるが、校区の総面積の半分ほどを占めている。

この校区の一部にもなっている高師原台地は、洪積世の時代に堆積してできた土地で、礫や砂が水平に層をなしている。表層は、やや淡い赤褐色土または黄褐色土で、強い酸性の土壌である。

この酸性の土地は、大戦後までの長い間、植物の繁茂を拒み、また固い土質のため人々の耕作をも受け入れなかった。そのため、明治から昭和20年（1945）まで陸軍の軍事演習地として使われてきたのである。

一方、梅田川の沿岸は、低湿地帯であったが、植物のよく育つ肥沃な土質であったことから、古来よりこの流域から台地にかけて、人々の生活が形成されてきたのである。地質に関して特筆できることとして、高師原台地は、県指定の天然記念物「高師小僧」の出



高師原の地層



高師小僧

土地である。同類の出土品は、他の地方にもあって、その名称には地方名を付けて「〇〇高師小僧」と命名されているということである。やはり、高師小僧は「高師」が本家なのである。

## 2 気候と災害

### (1) 気候

気候は温暖にして、年間平均気温は約15℃前後で比較的すごしやすい。平年降雨量は1,500mm前後であって、学校や神社の敷地には、温暖地帯に多く見られる広葉樹林がうっそうと繁茂している。冬季の12月から春先には、この地方特有な『三河の空っ風』が偏西風に乗って吹き抜ける日々が多くなり、体感温度は冷たい季節になる。しかし、降雪は珍しく、降ってもチラチラする程度で積雪にはならない。

### (2) 竜巻被害

近年において、竜巻被害が発生したので取り上げることにした。この地域は古くから竜巻や小規模のつむじ風が発生するといわれている。この現象は高師地域の固有の現象ではなく、過去の竜巻の事例を調べれば、愛知県及び三河地方において昭和の時代に20回以上も発生しているのである。



竜巻縦走被害（三本木町）

竜巻の発生しやすい原因は、三河湾に近く、ここを表にし、北の奥地に三河山地が立ちはだかり、南風は山地に遮られて渦巻きが発生する。この現象が増幅され空気は上昇下降が繰り返されて竜巻が発生しやすいのである。

平成11年(1999)9月24日午前竜巻が発生、校区南側境の野依町より発生、北北東に進み、西高師→上野町→ユニチカ東方を縦走、最後は豊橋市役所東部を通過消滅した。

その結果、高師小学校においては負傷22人、建物にも被害が発生した。さらに、校区内の多くの民家、企業の建物が半壊、屋根の被害が広い範囲で発生したのである。



高師小学校教室被害

## 3 校区の移り変わり

現在の高師校区は、8町からなる広さ、区画となっているが、これは、時代とその時々的情勢による幾度かの変遷を経てなったものである。しかし、高師（たかし）の名称、呼称は、古くから何ら変わることなく今日にいたっているのも事実である。

ここでは、古来から変わることなく続いてきた「高師（たかし）」の地名に含まれた地域がどんな広がりであったのか、それがまた、

どう変わってきたのかをイメージしながら記録をもとにたどってみたい。

## (1) 地名の由来

「たかし」の地名の生みの親は、「高巢鹿之別」という人物であるという説がある。彼は、先史時代に梅田川流域を根拠地として、南は表浜から東は白須賀まで勢力下においた豪族であった。

現在では、この一族についての証明はできないが、その「高巢鹿」の家名が「高蘆郷」の元祖だとされているのである。

## (2) 校区の変遷

### ①古代の「たかし」

平安中期の歌人、源順みなもとのしたがう (911～983) が書いた「倭名抄わみょうしょう」の中に、三河国渥美郡の6郷の一つに「高蘆郷」という名称の地名が記されている。この高蘆郷は、梅田川流域を中心とした広い範囲にあった村(里)々を包括した名称であり、それは、平安時代以前から確かに歴史上実在していたといえる。この「高蘆」が、今日の高師(たかし)の名称の元であり、また、区域も重なっている。

### ②鎌倉時代の「たかし」

建久3年(1192)の記録に「高足御厨たかあしみくりや」の地名が出てくる。平安の時代から渥美郡の各地が、伊勢神宮の領地「御厨」となっていたことを合わせ考えると、当時の「たかし」も、「高足御厨」として存在していたことを物語っている。

また、この高足郷は、鎌倉と京を結ぶ東海道の要衝の地であつたらしく、東西に行き交う人々に「高師山」「高師の原」などと歌に詠まれたところで、その区域の広大さが想像できる。

しかし、建仁1年(1201)から延元2年

(1341)にかけて、七根、寺沢、小島、細谷の村々が高足郷より分離していったとの記録が見られる。高足郷の領有をめぐって分割があつたかもしれない。

### ③江戸時代の「たかし」

この時代になると、「高足御厨」の名は消え、「高足村」の名称で記録にでてくる。

この高足村から、1627年山田村が分離、続いて江戸末期までに芦原、小松、佐藤、藤並、森田、小池、高師原新田などの村々が分離したとの記録がある。このことから、これまで歴史的に保たれてきた広さをもつ「高足村」の区画は、かなり狭くなってきたようである。

### ④明治時代の「たかし」

明治のはじめ、高足村は、一時期額田県に編入されたが、すぐに愛知県渥美郡「高師村」と名称を変えて編入されている。今日の「高師」の名称の登場である。

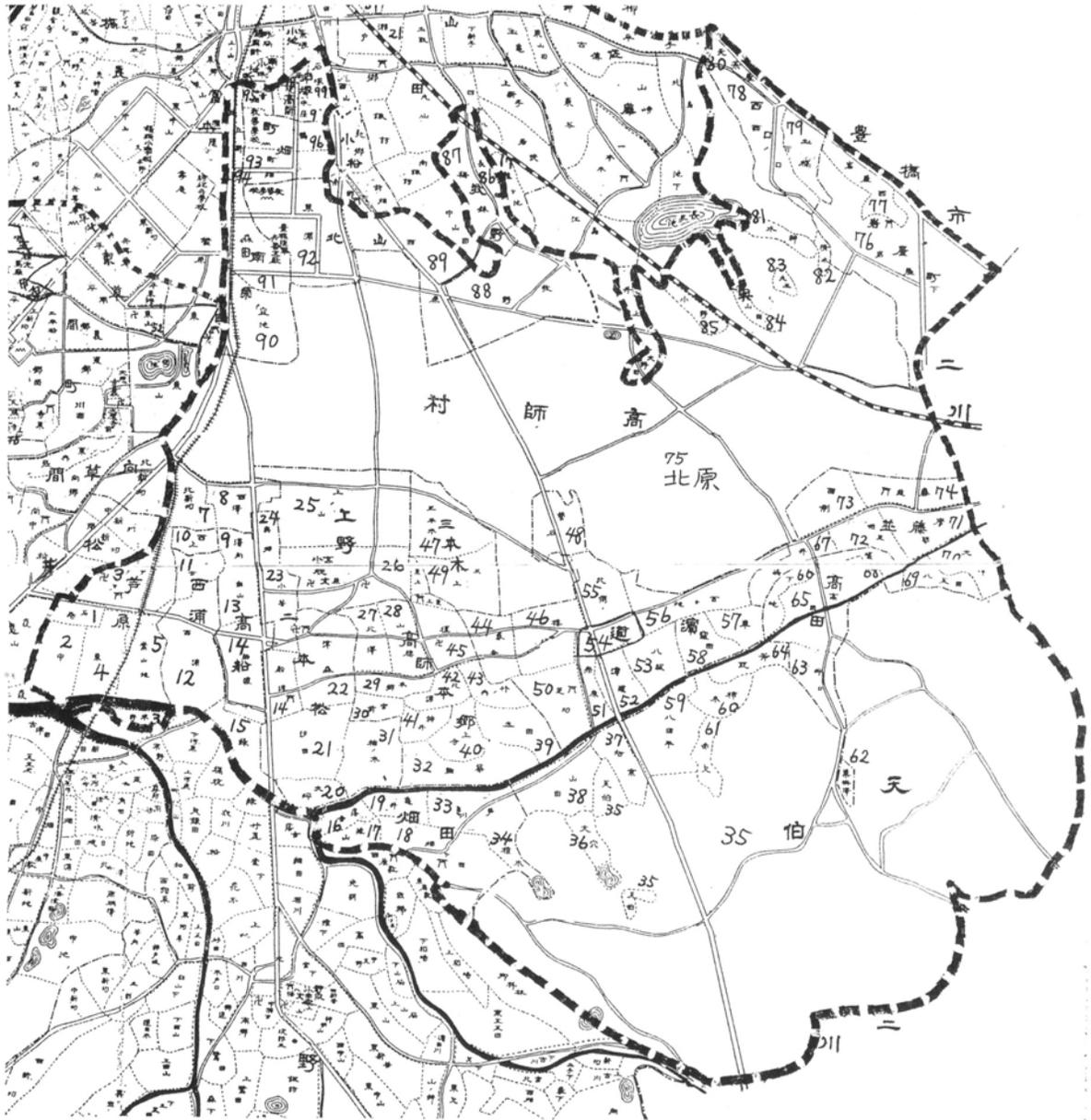
明治11年(1878)、高師村は、周辺の高師新々田、高師新田、森田新田、芦原新田、高師原尾先新田、藤並新田などを合併して、村の区域を広めている。

しかし、明治22年(1889)には、高師村から植田、野依が分離して、区域は狭くなったが、それでも99字をもつ大きな区画の村であった。(次ページ参照)

明治39年(1906)、高師村は、福岡、磯辺、野依、植田、大崎を合併して村の区画は一段と大きくなった。そして、この年市制を布いた豊橋市と接する高師は、市との結びつきを一層深めながら、この広い村域の北部を軍用地とし、陸軍15師団駐屯を受け入れ入れたのである。

### ⑤昭和の時代の「たかし」

昭和7年(1932)、渥美郡大字高師村は、豊



高師村99字

橋市に合併編入された。この時、これまで渥美郡大字高師字〇〇であったところの「字〇〇」が、まとめられて多くの町が生まれ、市への合併を機に高師村から分離していった。

例えば、北丘、高師石塚、町畑、牧野、北山、岩屋、西口、藤並、高田、浜道、三本木、上野、高師本郷、畑ヶ田、二本松、高船、西浦、芦原、高師、天伯などの町々が誕生し、それ

ぞれの区画をもった。そして、旧来の高師村の区画は消えたのである。

さらに大戦後、陸軍用地となっていた高師原台地の開拓に伴い、新たな町と字が生まれた。曙町、西幸町、東幸町、弥生町などである。

昭和20年代に入り高師校区は、藤並、高田、浜道、三本木、上野、高師本郷、畑ヶ田、西高師、芦原、高師、天伯、曙、西幸の町々

を含む大きな区域となった。

そして昭和30年代には、校区内の開発と市街化が年々進み、人口も急激に増加して、天伯校区が分離した。昭和52年（1977）には、曙町、西幸町、藤並町、高田町の幸校区が、さらに昭和56年（1981）には芦原校区ができ、西高師、芦原、高師の町々が分離して現在に至っている。

平成の今、高師校区は、畑ヶ田、浜道、高師本郷、上野、新西高師、松並、ユニチカ、三本木の8町を合わせた区域となっている。

### (3) 人口、戸数

明治39年（1906）豊橋市制施行から平成17年4月現在の豊橋と高師校区の人数推移は別表の通りで、当初の958人が100年後に12,977人（外国人も含む）と、13倍強に膨張している。

江戸中期の寛延3年（1750）高足村差出帳の記載内容が興味深い。

三州渥美郡高足村が家数百六拾六軒内庄屋式軒、組頭三軒、本百姓百廿六軒、水吞三拾式軒、人数八百五拾三人内男四百廿拾八人、女四百拾六人、出家四人、神主壹人、医師壹人、大工壹人、道八壹人、漆問屋壹人、茶売商人五人とある。

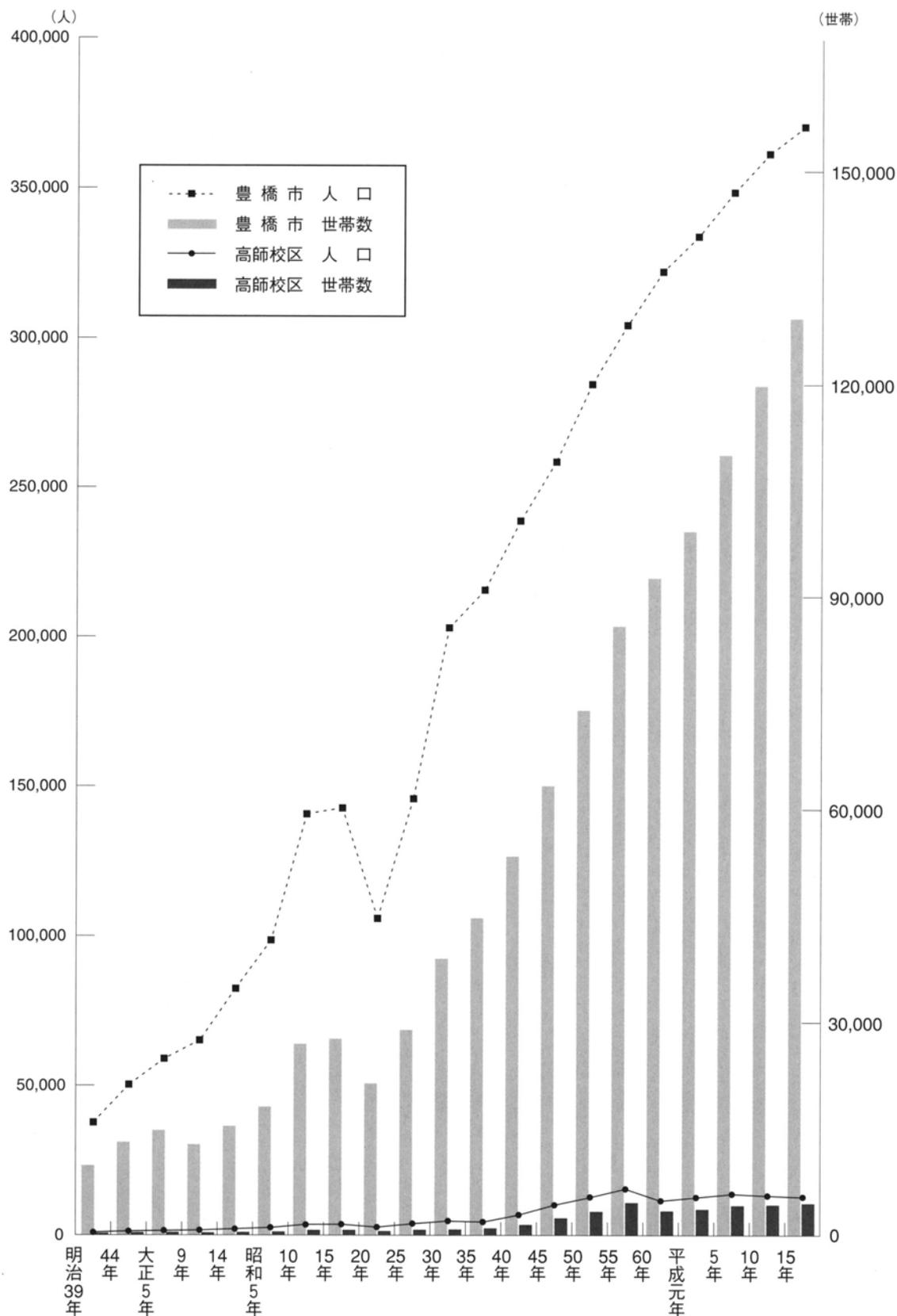
明治14年（1881）高師村誌では、戸数三百十戸、人数千四百六十五人、男七百廿拾五人、女七百四拾人と約200年間でわずかに612人の増加であるが、1戸当たりの世帯人数は4.7人が5.1人と増えている。

豊橋市・高師校区の人口推移

年度	世帯数		人口		備考
	豊橋市	高師校区	豊橋市	高師校区	
明治39年	9,900	252	37,635	958	8月1日市制施行
44	13,234	337	50,227	1,279	
大正5年	14,950	58,950	58,950	1,501	
9	12,916	329	65,163	1,659	第1回国勢調査
14	15,559	396	82,371	2,097	第2回国勢調査
昭和5年	18,312	466	98,555	2,510	第3回国勢調査
7	26,010	662	142,579	3,631	9月1日町村合併
10	27,285	695	140,735	3,584	第4回国勢調査
15	28,024	714	142,716	3,634	第5回国勢調査
20	21,660	552	105,840	2,695	人口調査11月1日
22	27,213	693	129,355	3,294	第6回国勢調査
25	29,297	746	145,855	3,861	第7回国勢調査
30	29,481	788	202,985	4,759	第8回国勢調査
35	45,254	955	215,515	4,436	第9回国勢調査
40	54,061	1,468	238,672	6,782	第10回国勢調査
45	64,117	2,407	258,547	10,086	第11回国勢調査
50	74,897	3,347	284,585	12,629	第12回国勢調査
55	86,958	4,623	304,273	15,474	第13回国勢調査
60	93,847	3,436	322,142	11,510	第14回国勢調査
61	95,319	3,490	325,200	11,980	推計人口
62	96,773	3,543	327,876	12,162	〃
63	98,069	3,591	330,130	12,325	〃
平成元年	100,523	3,680	333,847	12,634	〃
2	103,668	3,925	337,982	12,421	
3	106,987	4,051	342,609	13,206	推計人口
4	109,481	4,145	345,920	13,514	〃
5	111,459	4,220	348,502	13,758	〃
6	112,881	4,274	350,391	13,934	〃
7	115,075	4,087	352,982	12,700	第16回国勢調査
8	117,612	4,177	355,965	12,813	推計人口
9	119,862	4,257	359,411	13,058	〃
10	121,408	4,312	361,376	13,226	〃
11	122,618	4,355	362,234	13,226	〃
12	124,724	4,296	364,856	12,599	第17回国勢調査
13	127,076	4,377	367,343	12,804	推計人口
14	128,839	4,438	368,646	12,982	〃
15	131,028	4,513	370,490	12,761	〃
16	133,254	4,590	372,343	12,978	〃
17	139,802	4,822	377,814	12,977	4月1日現在住基+外人

※昭和22年（1947）以前の高師校区世帯数・人口は全て推計値

豊橋市・高師校区の人口推移



## 第2章 歴史と生活

### 1. 高師校区の歴史

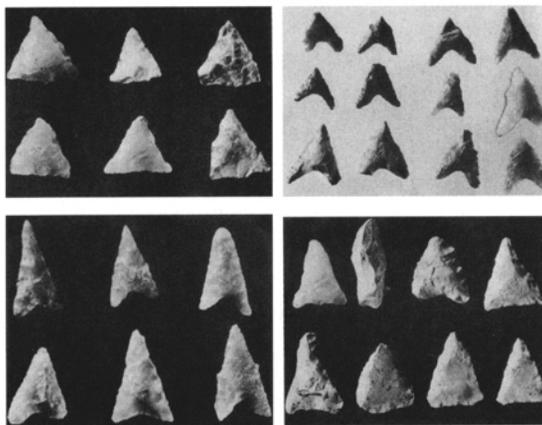
#### (1) 原始時代

高師校区は、地理的には渥美半島の東端、半島の付け根の位置にあり、そして、歴史的には古くから渥美郡に属していた。

この渥美郡の地には、数千年前より先住民が生活していた足跡が各地にみられる。その主な地域としては、渥美半島の西部の福江港湾岸、中部の汐川河口地区、そして東部の梅田川流域地区である。

ここ高師は、その梅田川流域の一地域で、原始の時代より人々が生活した足跡、遺跡が数多く点在している。それらの遺跡は、すべて梅田川の沿岸から台地にかかる付近に分布している。

遺跡の場所や出土品から推測してみると、この梅田川流域に住み着いた先住民は、水の心配もなく見晴らしのよい台地の中腹を住家として、台地の森で狩りをし、川や入り江で魚介類を採って生活していたようである。



古代矢じり

今日までその遺跡より採取されている物に、縄文時代の石核、石の矢尻、弥生時代の石器、土器などがあり、その数も多い。

やがて、この地の先住民は、狩猟採集生活に加え、稲作農耕生活を営むようになっていき、人口の増加が始まり、ムラを形成していった。梅田川の上流部と下流部に古墳遺跡がみられることから、幾つかのムラを統合支配した村長むらおさのような権力者も生まれていたようである。

こうした先住民の川辺や海辺での暮らしが、現在にも残る校区付近の地名を生み出したのではなかろうか。例えば、船渡、津森、北浦、船原、浜道等々の地名がそれである。

#### (2) 古代から中世

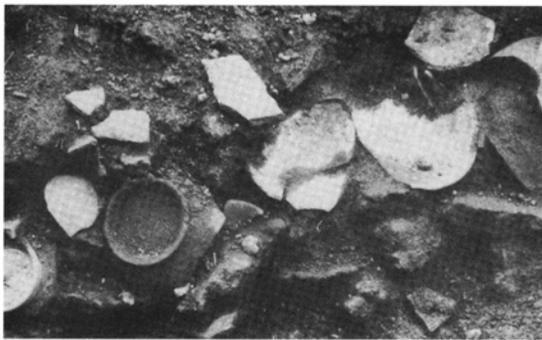
やがて7世紀、梅田川流域に住んだ人々の村は、三河国、渥美郡の6郷の一つに数えられた「高蘆郷」として奈良時代の歴史の舞台に登場する。

高蘆郷は、梅田川流域の二川、天伯、高師、野依、植田を含む一帯から太平洋岸の細谷から赤沢までも含む地域とされているので、後の時代の高芦村、高足村と比べて何倍もの広さをもつ地域と考えられる。そして、当時はおおよそ1,000人程度の人々が生活していたと思われる（※渥美6郷で推定、6,000人として）。

平安時代、この地は、東海道が通り、都へ、東国へと人や物が往来する要衝の地であった。そして、往来する旅人には、この地域は歌枕に「たかしま」と詠われ、鹿の鳴き声、

白波と船、松林と松風、須恵器づくりなどこの地で出会う風物が描写され、親しまれたところでもあった。

この歌に詠まれた須恵器づくりは、この地では、10世紀から11世紀にかけてさかんであった。現在の二川、藤並、野依、西高師には古窯群があり、そこから多くの碗や皿が出土して、当時の有様を物語っている。



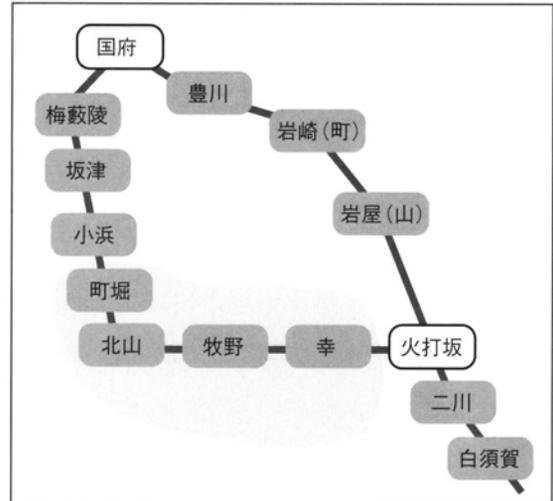
小谷古窯出土

平安末期、建久3年（1192）三河地方の伊勢神宮の領地の一部に「高足御厨」が、はいっている。これは在郷の有力者が国府の収奪から土地を守るために寄進したものであろうが、15世紀の半ばには「高足御厨」は消えていくのである。

鎌倉時代に浜道町の逆戈神社に源頼朝公が立ち寄ったとの伝説がある。しかも頼朝が寄進したと伝えられる鞍が本殿の奥にまつられている。

これらはいずれも伝承であるが、鎌倉街道の火打坂から分かれた間道、高足道が高師台地を通っていた事もあって、頼朝が立ち寄った可能性は、あり得る話である。

古来、明治3年まで逆戈神社の神事として、社の西側の馬場で、騎手は鎌倉時代の装束に身を固めて、2頭による競馬（荒武者行事）が執り行われたことが話として残っている。（第3章（4）参照）



鎌倉街道と高足道

鎌倉時代には高足より各地を結ぶ道路は、ほとんど造られていた。それは、田原道、小松原道、野依道、二川道などであり、表浜の伊勢街道から高足への連絡道も形成されていた。

鎌倉時代を経て、室町時代末期には応仁の乱をきっかけとして、世は乱れ、群雄割拠となった。

戦乱は、地方に及び、三河の諸将も二つに分かれ戦った。以後、一色、細川氏をはじめ、戸田氏の争いから、東三河地方は今川氏の統治下となった。

畑ヶ田町の西端、梅田川と浜田川の合流点の丘に、雉ヶ城址がある。伝えられることには、寛政年間（1460年代）地頭、富田弾正がこの城を居城としたと言う。その後、畔田右衛門くろに変わっている。

畔田氏は、15世紀中葉より梅田川の中流部から南部を抑え、16世紀の前期までに今川氏の家臣として栄えた。

このようにして、古代末から中世に栄えた伊勢神宮の荘園、高足御厨や野依御厨は、豪族の土地支配に変わって、古い御厨の支配は終わったのである。高師地域の土豪は、現存する古い石塔（宝篋印塔ほうきょういんとう、五輪塔ごりんとう）分布から

みて、本郷と浜道に住んでいたことが推定される。



宝篋印塔、五輪塔（高師本郷町字山腰）

### (3) 江戸時代

慶長9年（1604）に三河全域の検地が行われ、年貢として米が納められた。

税率は、享保11年（1726）老津での例では田50%、畑40%であった。藩は、勘定方から庄屋あてにその年の年貢割付状を届け、庄屋はこれを百姓に割り当て12月中に納める。その領収として皆済目録をもらって納税が終わる。

#### 土地と基準生産高

上田	1反当たり1石4斗
上島	1石3斗
中田	1反当たり1石2斗
中島	1石1斗
下田	1反当たり1石
下島	9斗

その組織は、藩主の厳しい統制を受けていた。村は原則として自治の形態をとっているが、村役人3役として、庄屋、組頭、百姓代があった。

この頃、高足村には源吉という庄屋が居て、藩の役人に年貢の減租を訴え続けて、村民を救済した言い伝えがある。

（第3章(3)参照）

渥美郡の天領の年貢米は、いったん高足湊（梅田川）に集められ、ここから江戸へ回送されたようである。

高足湊は、梅田川の右岸入り江に船着き場がつくられ、現在の高師神社の南に位置している。ここは船渡で地名のごとくに海上交通の要があった。その水深は満潮時3m、干潮時でも2mほどであった。1年間の船の出入りは200～300隻に及び、湊には問屋が旗を出しており、遠州方面からの伊勢参りは高足湊から渡航していた。元禄2年（1689）伊勢参り船のことで吉田湊と紛争がおき、高足湊よりの渡航が禁止となった。また、参勤交代が制度化されて高足村は、二川宿に近いために、人足、馬の賦役としての助郷の負担が重くのしかかった村であった。

高師本郷町内に渥美奥郡道という古道の一部が残っており、大名行列も往来したと古老の言い伝えがある。今は、公民館の底地となっている。

江戸時代の後半には、世間全般に貨幣経済へと変わってきた。これが貧しい農民や町民などが高利貸や富豪を目標にした騒動が起きた。

吉田藩においても、寛政3年（1791）から4年間、困窮村への救米が年2,000俵から4,500俵出ている。隣の野依村は元文2年（1737）困窮した12軒の百姓の未納年貢米を村中で負担している。天保8年（1837）二川、白須賀付近道路で連日8、9人の餓死者があった。米価は、天保3年（1832）に10両で買えた米23俵が、8年には4分の1の6俵となったほどである。

### (4) 明治になって

明治2年（1869）に吉田藩は豊橋となり明

治時代の近代化にむかって扉がひらいた。

明治6年(1873)、これまでの年貢、課税が廃止され、地価から算定された地租となる。いわゆる固定資産税の始まりである。土地の収益から計算した地価の3%を金納地租として土地所有者より徴収した。これによって、土地の所有権が明確となった。納税の対象外の土地は官有地となる。高師原の北、川の南は広大な官有地となって、その結果、後に陸軍の演習地となる基盤ができた。

村の近代化の一つとして、発電事業がある。発電は、梅田川の上流の高師村細谷川で農業兼水車業を営業していた加藤弥平次の水車場を買い上げ、ここに23馬力の洋式水車を改造して発電を開始した。明治27年(1894)開業したが、結果水量不足で発電量不足と送電がうまくいかなく失敗に終わる。その後牟呂に発電所を造ったりしたが、本格的な施設は明治41年(1908)に第15師団の誘致によって、水力発電所の増設により45年頃から一般に電気の普及が広まった。

### ■高師村の地租と戸数

南は天伯原、北は、高師原に挟まれた中間の幅わずかに2~3kmに過ぎず、梅田川の左右に耕地が集中してある。

新検地反別 明治11年(1878)

田	162町歩	山林	274町歩
畑	143町歩	原野	22町歩
宅地	18町歩	雑種	43町歩

地租 明治11年(1878)

地租	2,270円
雑税	6円
合計	2,276円

戸数等 明治9年(1876)

本籍	300戸	士族	2戸
		平民	280戸
		神社	10戸
		寺	4戸
		外入寄留	4戸
人口	1,465人	男	725人
		女	740人
		他	外入寄留
牛馬	120頭	荷車	2輛

### ■梅田川

村の南方にあって、堤防の高さは堤内の水面より3.6m。平水深1.8m。川幅27m~72m。流れはゆるやかで舟筏が航行できた。

■物産 明治12年(1879)

米	1,500石
麦	1,000石
大豆	200石
粟	300石
甘藷	1万貫
大根	100貫
葉藍	100貫
桑	1,000貫
茶	100貫
素麺	200貫
木綿	500反
瓦	100万枚
わらじ	1万足

(養蚕は慶応2年(1866)吉田藩が藩士に高足原を開拓させ桑を植えさせている。)

職業は、農業が主であったが、副業として養蚕、木綿の織物、茶、素麺にわらじ造りなどがあつた。

### ■軍事

明治17年(1884)陸軍第18連隊が名古屋で編成、翌年豊橋元吉田城に駐屯することとなった。軍都豊橋のはじまりである。

高師原、天伯原には、広大な軍用演習地に適した原野が存在したため、明治41年(1908)

第15師団指令部の誘致に成功した。そして、高師村に師団司令部を中心にした、兵舎、厩舎、兵器廠が並び、その東に高師原練兵場、演習場が続いた。

例えば、練兵場（曙町＝ユニチカ）、陸軍兵舎、秣倉庫（緑地公園）、演習場（高師原、天伯原）などがあった。

高師原及び天伯原の陸軍演習地内には高豊村、二川村、高師村の農民の広大な耕地が介在していた。

日常生活は軍靴の響きに馬のいななきを耳にする日々であった。演習期間の農地への立入り禁止はもちろんであるが、軍によって一方的に立て札で通告することが多かった。特に演習の時期が農繁期の6～8月が多く迷惑をこうむった。陸軍当局にこの補償の件で、たびたび交渉をもったが農民の期待に添うものはなかった。

そこで当時の情景を表す話として、浜道町に住んでいた方によると、朝は砲車のガラガラきしむ音と、兵隊さんのギュギュという重い靴音で目を覚まし、夕方は馬蹄の響きを子守唄にした。（高師風土記より）

### (5) 大正から昭和になって

大正3年（1914）に勃発した第一次世界大戦の影響で、貿易は今までの輸入超過から一転、輸出が急に伸び大戦景気となり、物価高騰を招いた。

高師村農家の主な農産物の収入（一戸当たり平均）  
大正10年（1921）

米	麦	繭
10.0石	4.8石	5.3貫
396.3円	105.7円	264.2円

桑園の面積は田と畑合計、面積約30%の比率であるが、収入の比率は53%を占めた。養

蚕は商品作物として収入比率の高い農産物であった。

高師村、福岡村、磯辺村、野依村、植田村、大崎村の状況  
大正13年（1924）

総戸数	2,565戸
農家戸数	1,627戸
田	9,306反
米	13,249石
桑園	5,940反
繭	48,043貫
畑	9,884反
麦	6,661石

### 養蚕家の様子

豊橋が糸の町として発展していた頃、高師でも養蚕が盛んで貴重な現金収入源だった。家の座敷はもちろん、縁側の板敷きまで蚕だなで埋まり、お蚕さんが間断なく桑を食べる音がザーッと、まるで雨降りのようだった。

また、高等小学校が卒業間近になると娘さんのいる家には町の製糸工場から勧誘人が訪ねてきて、親たちと話し込んでいる姿をよく見かけた。

戦前の農作業は、牛と人力で耕作をした。物を運搬するのは牛車か、リヤカーであったが、常には背中に背負うか、天秤棒で担ぐかであった。畑や田を耕すのは人力で、鋤を担うか牛で曳くかであり、種まき、田植えは背中を丸めて手仕事、麦、稲刈りは鎌で、足踏みの脱穀機で脱穀、後は唐箕によって選別し、厚いむしろのござに広げて乾燥していた。

渥美郡高師村は昭和7年（1932）9月1日より豊橋市と合併し、豊橋市役所高師出張所が村内にできた。

合併前高師村の統計数値 (昭和6年12月末)

種別	戸数	人口
本籍	564	3,757
入寄留	97	685
出寄留	146	1,175
差引	515	3,267

高師小学校学級数 (昭和6年12月末)

尋常科	7クラス
高等科	2クラス

昭和13年(1938)、国家総動員法が成立し、戦時体制一色となった。国民の徴用、物資の徴収、物資の統制は、ガソリン、鉄鋼、石炭、綿糸、ゴム製品に及んだ。

昭和15年(1940)、食糧統制を経て昭和17年(1942)食糧管理法制定に至り、米、ムギ、雑穀、甘藷、じゃがいも、麺類、味噌醤油の配給制、総合衣料キップ制になり、衣食住総てが統制になった。

大正2年(1913)農業協同組合の前身、高師村産業組合が設立された。指導者は藤並町出身の柴田文一氏であった。(第3章(3)参照)

大正5年(1916)、高師山が県の名勝地に指定をうけ、高師小学校の南に村民挙げて奉仕し、一木一石を集めて造園、ここに『勝地高師山』の石碑を建立した。

大正8年(1919)10月、高師原、天伯原において陸軍大演習が行われた。時の師団長はひがしくにのみや東久邇宮邦彦殿下(昭和皇后陛下の父君)であった。師団長が演習の途上、休息に浜道の或る民家に突然立ち寄られたので、家人はびっくり仰天したとの話が残っている。

大正11年(1922)師団が高師村に駐屯するようになって、人と物の輸送のために渥美線が開通した。

渥美線料金

電車料金	新豊橋～田原間	61銭
	高師～田原間	35銭
(当時のキャラメル10個入り1箱5銭)		

## (6) 悲惨な戦争と高師

昭和16年(1941)大東亜戦と名付けて日本が世界大戦に突入する以前、すでに中国との間に、10年を越す戦火の日々が続いていた。(日支事変)その当時の高師はまだ風習、まわりの景色など明治のころとあまり変わっていなかった。

この開戦で国を挙げた戦時体制が強化されると共に、生活環境全般が激変していった。特に主食が配給制となったところから、目に見えて影響が出始め、厳しい食料統制がひかれ、農家(高師の85%以上が農業経営)はわずかの保有米を残し、供出が強制された。また、徴兵、志願兵、招集、再招集として、主力の耕作者である壮年男子、子弟が故郷高師を後に戦地へと赴いたのである。

昭和18年(1943)徴兵年齢が19歳に引き下げられ、同19年には18歳以上が兵籍に編入された。高師学校の高等科2年生は大崎海軍航空隊に動員された。以後、青年学校生徒と一緒に労役奉仕が繰り返され、授業はほとんどで出来ないようになった。

高師学校にも軍事教練が義務づけられ、在郷軍人会より派遣された下士官クラスの教官により、厳しい指導と訓練が行われた。また、鉄拳制裁も軍隊式でごく日常的なものだった。

**疎開命令発動** このころより、本格的な空襲が頻発するようになった。焼け出され、と言われた戦災者、縁故を頼った疎開者など、高師でも日をおって増加の一途をたどっていった。戦局の悪化とともに地元の人も、疎開者も、戦後まで続く劣悪な生活を余儀なくされた。

戦争も末期を迎えるころ——高師は地勢的に、高師原、天伯原の広大な原野に挟まれ集落が点在していた。人家の多くは樹森に囲まれ、工場など皆無だったので、高空を飛ぶB29爆撃機の標的となる恐れはなかったが、遠州灘沖に航空母艦が姿を表すようになると、艦載機が頻繁に襲って来るようになった。これは始末の悪い敵であり、動くものを発見すると超低空で銃撃して来るので、野良仕事中でも身を伏して難を避けなければならなかった。

出征兵士を出した農家で年寄りと、嫁、幼児などという家庭も多かった。高師の農業は当時、役牛以外に機械などと云えるものはほとんどなく、自分の労力が頼りであり、女性や、年端のゆかない子供が日暮まで牛を追う姿は痛々しかった。

#### 軍隊と同居する高師小学校

国土防衛軍、恐（いかり）部隊が編成されて、表浜海岸一帯に展開、敵前上陸に備え、大規模な陣地構築がはじまりました。高師小学校も同隊に接収され、構内は軍人と生徒が混在するようになり、無数の防空壕が掘られた。ちなみに、一般家庭でも人の集まる処すべて防空壕は必須のものだった。

#### (7) 戦後の高師

現在の発展した校区の様子から、この基盤づくりといえる先人の尊い努力の歩みがかいま見える。終戦当時の土地の大部分は、演習地であり、高師原の南西から南東に囲むように、古くから人々の住み着いてきた集落が点在しているに過ぎなかった。芦原、高師、上野、高師本郷、浜道、藤並、高田といった小さな村であって、戸数も数戸から数十戸と言った群落で、静かな田園地帯であった。



広大な田畑

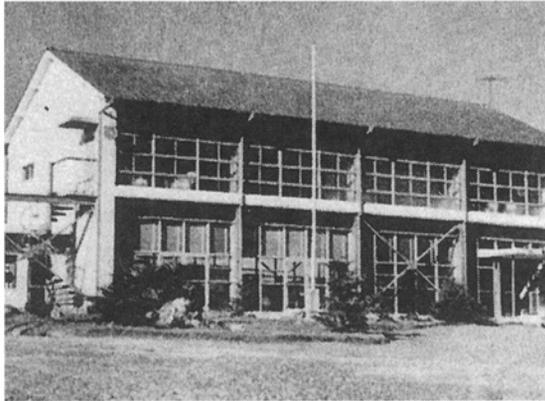
そんな中、県下最大の開拓地として脚光を浴びたのが広大な旧軍用地であった高師原、天伯原である。当時豊橋地区は3千haともいわれ、1,000戸を超える人々が受け入れられたのである。

食糧増産と失業対策の二つの目的から、国の緊急開拓事業として県と協力しながら進められた。

昭和21年（1946）の5月には、この地域の入植者を対象に開拓指導所が浜道町に開設され、9月には開拓実験農場も併設された。

同年11月6日、<sup>くわいれしき</sup> 鋤入式がおこなわれ、開拓が着手された。

この開拓農民は、戦災者、海外引揚者、復員者、失業者などを対象に、自己資金と家族労働があることを条件に一般応募という形で入植した。10戸単位で耕作区を決定し、各戸

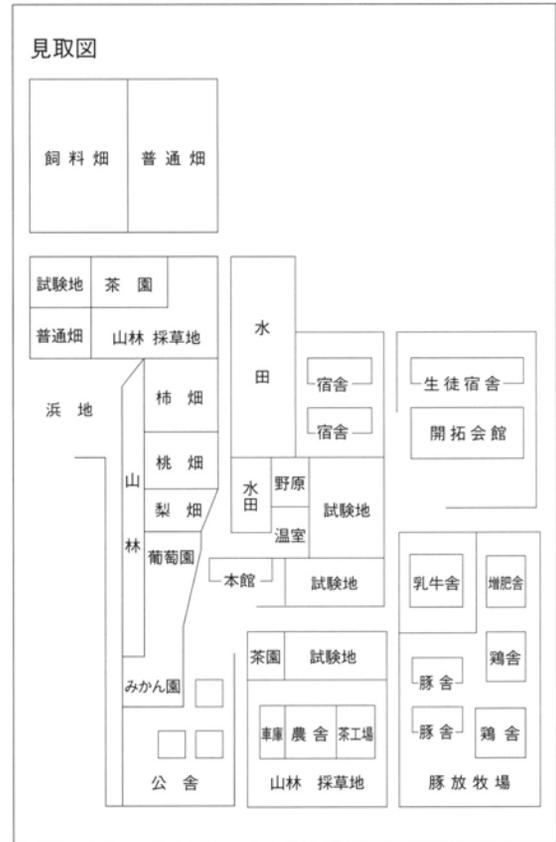


新開拓会館

1～2haの土地仮配分を受けた。高師原では市街地に隣接していたため、戦時中からすでに軍人、軍属による開墾が行われており、豊橋陸軍予備士官学校などの関係者が耕地の払い下げを受けていた。彼らは開墾用具や軍馬などを持っており、他の入植者よりも条件が恵まれていた。

しかし、この旧軍用地はもともと小松や灌木しか生えない荒地であり、農地には適していなかった。土壌は強い酸性で、有機質に欠けており、地形は丘陵地帯で水の確保がむずかしく干害の起こりやすい場所であった。さらに、開拓の大きな障害となったのは、開墾の際の抜根作業である、マツ、ツツジ、ササなどの灌木の抜根は、人力では限界があった。そこで、威力を発揮したのが旧軍隊の小型戦車や野砲牽引車に碎土機を取りつけた、20台ほどの急造ブルドーザーであった。1台で50haの開墾ができ、人力開墾の150倍～300倍の能率をあげることができた。しかし機械の入れない場所では人力に頼らなければならない、その労力は大変なものであった。

次に、開拓農民たちが取り組まなければならないことが土壌の改良である。やせ地を肥やすためには、野草、海藻、馬糞、下肥、石灰などを大量に投入する必要があった。家畜を飼育し、その厩肥きゅうひを利用する



新開拓会館見取図

のが効果的だとわかっていても、家畜は高価で容易に手に入らなかった。入植者たちは10km程離れた市街地まで荷車を引いていき、人糞尿をはじめ路上の馬糞まで集めて畑地へ運ぶ苦労を繰り返した。それでもやせた土地ではいもさえ大きくならず、入植1年間は、食料営団の米の配給を受けて飢えをしのいだ。入植者たちは、じゃがいも、さつまいも、かぼちゃを主食として、米の配給があった時だけ、米にこれらを入れた雑炊などを食事としてとった。なかには、生活難のため配給米を食べずに売って生計を維持する入植者もいた。

## 当時の生活

戦後昭和21年（1946）の肥料事情は極度に乏しく、入植者は、個々に市内各戸をリヤカーなどで回って人糞尿、じんあいを集めていたが、昭和24年（1949）岩西開拓農協が静岡鉄道管理局と交渉し、静岡市から3,000千haに及ぶ開拓地へのじんあい輸送の了解をとりつけた。その輸送のためにトラックが調達された。

酸性土壌に強いムギ、いもは米にかわる秋冬作の主要作物であった。特にコムギは酸性土壌に強く肥料が少なくてすむ。しかし品質が悪かった。

コムギをいくばくか製粉所（この場合、農協が多い）へ持っていくとパン、うどん、小麦粉などと交換してくれた。

入植者による「イモ飴」加工によって現金収入を得た者も少なくなく、一部「イモ飴でのしてきた」などと言われた人もいるようだ。昭和25年（1950）1月食糧統制解除。

近隣の従来からの居住者からは「山の人」と呼ばれたり、子供は「山の子」とか「営団ボッコ」などと呼ばれた。しかし、「なせばなる」の強い意志で「開拓者魂」を持った人たちが残った。

## 2. 産業の移り変わり

## (1) 農業

昔から高師原はやせた水のない乾燥した台地であり、農地に適さなかった。明治、

大正、昭和にかけての高師村は軍隊の恩恵を受けていたものの、演習場に土地を奪われ、幾多の戦争によって苦しみ、泣かされてきた。

各集落の周りには田畑があり、梅田川沿いの高師校区の東部から中、南部にわたる農地は、昔のままの不整形で、小さな田畑が点在し、加えて起伏が大きい状態であった。

このあたりは幕末期から、木綿、藍、菜種、たばこ等商品作物を多く生産していたが、明治10年（1877）より、大正、昭和の始めまで、養蚕業は発展し、畑は一面の桑の木で埋まった。



お蚕さん

蚕は体長0.5cmから桑の葉を食べて成長脱皮を何回もして、1ヶ月余りで繭を作る頃には7cmほどになる。蚕が大きくなるにつれて家中、蚕の飼育棚でイッパイになり、寝る所も、台所も隅に追いやられた。えさの桑の葉をつむ仕事に、子供たちも動員された。小学校から帰ると、大きな桑つみかごイッパイ摘んでは、幾らかの小遣銭をもらった。しかし、雨の日の桑摘みは大変であった。

製糸業はアメリカの未曾有の繁栄に支えられて活況を呈し、この地域の農家もその

恩恵をうけた。しかし、昭和5年（1930）暮から日本に及んだ世界恐慌の波は、豊橋の製糸業をもまきこんだ。

それは農家にも養蚕業の不振としてあらわれ、農家の現金収入の道を断たせることになった。

この時代の農業は、養蚕と水稲及び裏作の麦の組み合わせで農家経営が最も安定していたといえる。

その後、食糧政策の強制の下で臨戦体制に入ると、さつまいもの栽培面積は急増し、昭和19年（1944）には桑とその地位がいれかわった。さつまいもは歴史をひもとくまでもなく、これほど戦中戦後の飢餓を救い活力を与えたものはなかった。

アルコール燃料の抽出にも分野が広められ、千切りとして供出の対象にもなった。イモ飴が注目を集め、家内工業的飴屋が随所に水煙をあげ、甘ずっぱい香りを漂わせた。生のいもの現金販路としても重宝な存在であった。

昭和25年（1950）頃より高師本郷町に農民の結束により、産地澱粉製造工場が建設された。最盛期には山のように積まれたさつまいもの山が幾重にもあった。

終戦から10年、社会情勢、食糧情勢も好



澱粉工場

転し、澱粉粉も安い製品が輸入され、畑の夏作物はさつまいもから西瓜へと変わった。また冬作もムギから大根、白菜に変わった。

高師校区には灌漑用のため池がいくつか残っているが現在はほとんど使われていない。しかし水利権は残っている。高師本郷町北沢、山腰一带は、昭和40年（1965）頃までほとんど田んぼであった。子供らは、冬に氷が張るとスケートのまねをして遊んだ。

戦前には、円通寺の土地が多くあり、高師小学校と長池の間に教員住宅と田んぼがあった。

昭和43年（1968）には豊川用水が完成したが、市街化区域が指定されることを見越し、一部地域は利権を放棄した。以後、区域内の農地は急速に宅地化が進み以前の白菜畑や茶畑、鶏舎など元の面影はほとんど無くなった。

豊川用水通水以後、農業の生産性の向上を図るため土地改良を進めつつ、ハウス、温室等の施設園芸が急速に拡がり、夏は西瓜、メロン、スイートコーン、冬にはキャベツ、白菜、大根が作られるようになり、特にビニールハウスは昭和40年（1965）から18年間に60倍にも増え、農業粗生産額も、同期間にほぼ10倍になったのである。



ハウス園芸の様子



温室薔薇栽培



ハウストマト



温室蘭栽培

また現在では、この地域の農地は減少したが、市街化区域外の天伯、小沢、野依方面に農地を確保している。特に、ミニトマト、薔薇、蘭、大葉などの周年栽培も多くなってきている。

#### 大井用水

明治34年(1901)頃に梅田川の流れを変え、集落の一部を移転して開田を進め、高田地区に井堰を築造して作られた長さ約3.15kmの水路であって、昭和45年(1970)まで約81haの水田に水をひいた。

この間、地元では大井用水組合を作り、維持管理を行ってきた。昭和44年(1969)に豊橋南部土地改良区へ加入し、2ヵ年で全圃場の区画整理を実施し、以後、豊橋南部土地改良区が管理を引き継いできた。

しかし、昭和45年(1970)に大井用水の右岸に当たる一帯と上流の二川地区が市街化区域に指定されると、たちまち住宅、工場等が立ち並び、大井用水は汚濁されて、稲作が危ぶまれた。そこで、水源を豊川用水に求め、昭和55年(1988)に豊川用水の導水工事を完了してからは、大井用水はもっぱら市街化区域からの排水路として使われている状況である。

## (2) 工業

戦前、高師小僧や陸軍第15師団の演習地で知られていた高師原は、昭和20年(1945)8月の終戦を機に、農地として開放された。

その頃のようなすは、現在の新上野、松並、新三本木、曙、測点、西幸といった町々は全く姿を見せていない。これらの町のあるところは、そのほとんどが、さつまいもやムギの畑であったり、赤茶けた草も生えない荒地であった。

入植農民の血と汗によって、その広大な土地が、新しい時代にふさわしく生まれかわっていったのである。

昭和25年（1950）当時、松並町（現弥生町の一部を含む）は31軒であった。

現ユニチカ操業開始前後よりユニチカに土地を持っていた人の他の土地との交換や離農者、転職者が出てきて、農業継続者は10軒足らずとなった。

昭和25年連合軍総司令部（GHQ）による日本の綿紡績設備制限の規制解除により、大日本紡績（ニチボー…現ユニチカ）は工場増設計画のため調査したところ、高師原の土地が工場好適地としてあがった。加えて、愛知県や豊橋市の熱心な誘致もあり、昭和25年豊橋市と建設に関する覚書を締結し、同月27日に起工式が行われたのである。

工場建設工事は、夜に日をついで進められ、ついに、昭和26年（1951）10月15日、敷地面積約27万㎡、建物面積約8万6千㎡の日紡が誇る最新の設備と最高の技術を投入した一大工場が高師原の一画に誕生したのである。

ユニチカの変遷

創業	1889年	有限会社尼崎紡績会社
改称	1918年	大日本紡績株式会社
改称	1964年	ニチボー株式会社
改称	1969年	ユニチカ株式会社

主な規模 昭和51年（1976）6月

従業員数	男	女	合計
紡績	161人	344人	505人
織布	53人	133人	186人
その他	41人	29人	70人
合計	255人	506人	761人

当時、日紡豊橋工場は、綿製品に関しては全日紡の主力工場であり、生産日本一であったといわれ、常にフル操業をしていた。

昭和25年（1950）ぐらいから、現在のユニチカ工場の建設に伴い、市からの話もあって、土地を売却する者も出てきた。

価格は1反あたり5万円（1町歩あたり50万円）＋慰労金5万円計55万円を受け取り、離農、転職していった。

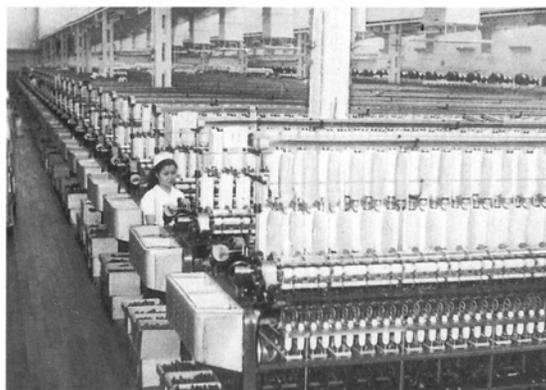
何やかやと未練がましく言う人もいたけれど、開拓者（主に軍人）は、農業と生活に疲れきっており、本音では「わりに舟」という気持ちであった。

昭和26年（1951）、現ユニチカ工場の操業開始頃より、野依街道沿いにお店ができてきた。

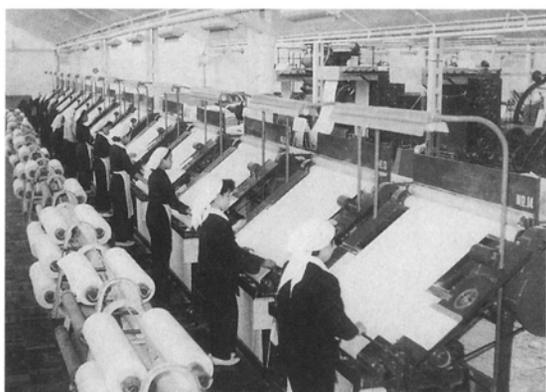
近隣の農家の方々はお盆になると、テント張りの牛車に乗り、サーカスを見に行ったものだ。



創業当時の大日本紡績（現・ユニチカ）全景



操業中の工場風景（1）



操業中の工場風景（2）

### 製品

綿糸、綿布、ポリエステル

### 生産量（年）

綿糸 8,200梱

綿布 60,000反

高師校区の工場進出は、この大日本紡績（株）豊橋工場の進出が引き金となって、その数が次第に増し、特に日本の経済の高度成長期、昭和40年代（1965）以後になると進出工場の数が増している。しかし、準工業地域にあるユニチカ工場を除いて、住居専用地域などの市街化区域のため、あまり大きな工場はない。工場の多い地区としては高師町をはじめとして、上野町（新上野）、曙町（測点）、西幸町などである。工場の業種も生活関連工業であり、他地域の工場の下請け的なもので、その数は少ない。

高師地区の主要な工業業種別事業所数

事業種	年度	S 43 (1968)	S 50 (1975)	H 16 (2004)
食料品		9	17	4 (10)
せんい工業・製品		6	7	1 (3)
衣服・見回品		1	0	0 (2)
木材・木製品		2	5	0 (0)
家具・装備品		3	6	0 (0)
パルプ・紙・紙加工品		1	3	1 (2)
ゴム製品		0	1	0 (2)
窯業・土石製品		4	3	2 (2)
鉄鋼		4	1	1 (1)
非鉄金属		0	2	0 (1)
金属製品		4	12	1 (5)
一般機械器具		5	3	1 (5)
輸送用機械器具		8	8	2 (7)
その他の製品		1	2	3 (11)
合計		48	70	16 (51)

（ ）は幸・芦原校区内事業所数の合算数字  
（平成16年度工業統計調査結果報告書）

上表より旧高師校区内の事業所数の年度推移からも増加をみせていない。

なお、平成16年度（2004）の「その他の製品」事業種は電子部品や電気機器などであり、近年の傾向である。

### (3) 商業、サービス

高師校区は、昭和45年（1970）頃からの人口増加にともない、幸校区や芦原校区が分離して、商業の状況も変わってきた。



商店街の様子（三本木町）

小規模店舗が減り、大型店舗が増えた。店舗数では昭和54年（1979）調べで280店舗あった商店が校区分離などの為、昭和60年（1985）には114店舗まで減少した。このように二度に渡る校区分離と近隣地域に超大型店舗が進出したため、商業も大きく変わってきたのである。

高師地区への商店の進出

年号	卸売店	小売店	飲食店	総店数	従業者数
S51	22	147	63	232	692
54	21	190	69	280	634
57	18	147 (62)		165	503
60	19	95 (26)		114	564
63	20	101 (28)		121	600
H3	16	106		122	640
6	19	130		149	671
9	14	98		112	582
14	14	83		97	720

（市統計季報51年度版より）

校区内商店の売上高は、昭和60年（1985）を最高に（1,952,156万円）あったものが、昭和63年（1988）には（989,180万円）まで減少した。しかし、平成に入り人口も増え、売り上げも回復にむかった。平成9年（1997）（1,528,572万円）まで増えつつあったが、平

成14年（2002）には（1,303,911万円）まで減少、店舗数も97店舗と減少している。

### 3.伸び行く高師

高師校区は、高師原台地の中心として、梅田川を中心とした農業地域であった。戦後は開拓により農地が整備されたあと、市街地化がすすみ人口が急速に増加した。そのため校区には、多くの課題が生まれてきている。

まず、道路など基盤整備が立ち遅れたまま宅地化が進んだため、大きな災害や火災などの場合、大型車両が通行できない等の問題が発生している。開拓時代の、畑や空き地がなくなり、傾斜地に多くの住宅が建ち新たな災害に対する備えも必要になってきている。

平成17年（2005）6月に総代会を中心として「高師会議」まちづくりを研究する会が発足して未来の高師校区のあり方を考える取組みが始まった。豊橋市の都市計画と高師校区の現状と将来、及び地域防災のあり方「消防から見た高師校区」などについて、勉強会を開催している。

そうした活動の中で、高師校区の「都市基盤整備」の必要性が課題となっている。未来の高師校区は、安全で安心な住みやすい町づくりの為、市制100周年の記念の年に意欲的な取組みを始めている。

将来の計画では、野依街道が20m道路に拡幅され、三本木町より上野町の真ん中を通る大規模な道路が予定されている。大きな道路とともに現在の住宅環境も変わってきている。

梅田川を中心とした農地を守り、高師校区の伝統である子どもを大切に、郷土を愛するところを脈々としてひきつぎ、豊橋南部地域の中心校区として伸びて行くことを期待するものである。

## 4. 総代会と校区の活動

高師校区総代会は、平成18年（2006）4月1日現在、広報配布数は三本木町1,280世帯、上野町900世帯、高師本郷町681世帯、浜道町560世帯、新西高師町270世帯、松並町117世帯、畑ヶ田町18世帯、ユニチカ町11世帯の3,837世帯として豊橋市内の51校区中7番目の大きな校区として発展している。

町総代の名称が生まれたのは、明治39年（1906）で、大正時代の米騒動、昭和5年（1930）からの電気料金の値下げ運動にかかわり総代会と市民が強く結集していた。昭和15年（1940）には政府が町内会の結成に力を入れたこともあり175の町内会とともに隣組が造られた。

昭和22年（1947）、それまでの町内会長が行っていた行政事務が市長に移管され、町内ごとに市役所から伝達が行われ連絡員制度として昭和28年（1953）まで続いた。昭和28年の自主的自治会の「総代会」が発足した。

### (1) 明日の豊かなまちづくり

校区体育祭は、50回以上も続いている高師校区の一番大きなイベントであり、特に最近では高師小学校のスポーツフェスタと合同で開催され最も大きな行事となっている。野球大会、ソフトボール大会など校区体育委員会が中心となって各種スポーツ活動の活発な活動をしている。

校区の文化祭としては、昭和55年（1980）から高師校区市民館が開館されるとともに校区市民館運営委員会が中心となり市民館祭りとして隔年で開催するとともに、社会教育委員会が主催する演芸大会は毎年、楽しく、にぎやかに開催されている。

### (2) 安全で安心な住みよいまちづくり

消防団を各町内会の22歳より35歳くらいまでの青年を選出して結成して豊橋市内でも優秀な消防団として第6方面隊の伝統ある活動を続けている。特に最近では、消火活動のみではなく火災予防、地震、防災の中心として懸命な活動を続けている。そして、女性を中心として平成15年（2003）より「高師女性防火クラブ」も結成され共同して防火活動を進めている。

昭和36年（1961）より結成されている校区交通安全委員会は、主要交差点での交通安全推進活動、広報活動を続けている。防犯委員会は校区内パトロールをとおして、犯罪の未然防止の推進活動をしている。

### (3) 青少年が健康で明るく育つまちづくり

高師校区の伝統で子ども達にあらゆる努力をおしまない活動として、昭和57年（1982）に結成された青少年健全育成会は、市内でも最も活発な組織として、中学校校区を本部、小学校を支部として青少年の健全育成を進め、現在は小学校単位の健全育成会として地域の人々とのつながりをより深めるなど活動をしている。平成17年（2005）よりはじまった「本郷中クリーン大作戦」、「中学校自主防災訓練」で地域と一体になった活動や、平成18年（2006）からは「高師校区子ども見守り隊」を結成して児童生徒の安全に大きく活動を広げている。

### (4) 災害から市民を守るまちづくり

各町内会で自主防災組織を結成して、全町内会に防災会が結成されている、特に近年町内毎に防災倉庫を建設するなど災害に対して備えを充実している。特に、校区防災訓練は300名から400名が参加する訓練を毎年実施して、防災意識の高揚につとめている。女性防

火クラブの防火講習、普通救命救急講習の実施で救命救急修了者が100名を超えて災害に備える準備も進められている。

#### (5) 美しく住みやすいまちづくり

老人クラブの活動は、公園の清掃活動や一人暮らしの老人の訪問活動など初め、子ども見守りのパトロール活動を積極的に進めています。子ども会も活発に活動をすすめていて、

子どもの球技大会、子ども夜店大会などを開催して育成活動を進めてる。校区にはスポーツ少年団活動として20年を超える少年野球の高師スカイラックス、親子で参加するホリデイサポートたかしっ子の会、校区市民館の「地域いきいき子育て事業」など明日の高師を担う子ども達のために活発な活動が始まっている。



昭和20年代の澱粉工場のさつまいもの山（後の本郷公園）



現在の本郷公園

## 第3章 教育と文化

### 1. 教育の充実

#### (1) 高師小学校のあけぼの

##### ①「学制」の土台…高足村の寺子屋、私塾

近代の学校教育は、明治政府が、明治4年(1871)に文部省を設置し、翌5年8月、「…必ず<sup>むら</sup>邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめん事を期す……」と太政官布告で「学制令」を全国に向けて発布したことに始まる。

※「学制」令…109章の中の「大中小学区の事(計画内容)」

全国を8大学区に分け、1大学区を32中学区に、1中学区を210小学区に分けて、各区に1小学校を設置する。

当時、高足村には、江戸末期から引き継がれてきた庶民の教育の場として「寺子屋」が円通寺や高林寺にあり、また、村の医師・芳賀家や平民の岡田家によって営まれていた私塾などがあった。そして、そこには、一人前

の商人や職人などに育てようとする熱心な村民の子弟が通い、その願いに師弟愛をもって応える多くのすぐれたお師匠さんがいた。

こうした村の環境が、高足村の庶民教育を学制制度にいち早く順応させ、スタートさせる土台となったと考えられる。

##### ②高師小学校のはじまり

明治6年(1873)7月20日、「第10中学区10番小学修徳校」という名称の学校が、高林寺で開校した(橋良には分校をおいた)。これが高師村の近代学校教育の始まりである。

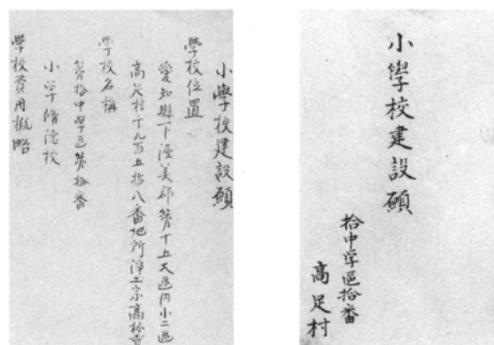
これは、高足村の人々が一大決意のもとに



改築前の高林寺 昭和51年(1976)撮影



寺子屋の様子



小学校建設願書

学校設立に必要な諸条件を整え、「小学校建設願書」を愛知県令（県知事）に提出し、認可を得て設置、開校したものである。

〈小学校建設願書に付された「校則」の一部〉

- ・ 3月と12月に、入学試験を行う。
- ・ 上級生の言うことをよく聞き、下級生をばかにしない。礼儀正しくする。
- ・ 学校は、午前8時に始まり、午後3時半に終わる。
- ・ 遅刻した者は、授業を受けられない。早引きも禁止。ただし、保護者の理由書を持参すれば、この限りではない。
- ・ 毎月25日に試験を行う。
- ・ 学校が休みの日  
紀元節、天長節、氏神祭典日、日曜日、  
12月25日～1月11日。

11年（1878）、施設の不備や児童数の増加に対応するため、高林寺から「津森」（現西高師町津森）の地に学校を移した。

しかし、その校舎は、古い民家を移築したもので、教室となる部屋数は少なく、しかも狭くて暗かったので、学習には大変不便であった。便所も校舎から離れた藪の中であって雨降りの日には、傘が必要であったという。



津森にできた学校（復元図）

学校が新地に移ったものの、すぐに教室の狭さや不足のため、再び高林寺を分教場として使って2学年が学ぶことになったり、また、浜道や藤並、高田の学童の通学が不便であったこともあって、浜海道（現在の浜道町）辻の薬師堂に分教場を（明治15～19年まで）設置するなど、安定した学習環境が整うまでには至らなかった。

当時は、このような環境の中で学童たちの勉学は続けられたが、明治14年（1881）の記録によると、高師学校の学童数は、80名（男55、女25）であった。

明治20年（1887）、「尋常小学高師学校」と名称が改まり、4年生までが義務教育と定められた頃には、次表のような学童数に近い増加を示している。

開校当時の学区

単位：戸

高足学校校区		橋良学校校区	
高足村	215	橋良村	114
森田新田	20	小浜村	63
藤並村	19	小池村	77
小松村	7	山田村	20
合計	261	合計	274

※学校の運営費は、校区で負担することになったが、大きな負担であった。したがって有料授業で運営された。

こうして始まった「修徳校」は、教授3人、有料授業で営まれ、入校試験日や転校退校手続き、始業時間や遅刻早退、休校日などの校則も定められていた。

その後、修徳校は、明治6年（1873）12月に「第12中学区10番小学高足学校」と改称し、また、明治10年（1877）には「第10中学区28番小学高師学校」と改称を重ねながら、明治

渥美尋常小学高師学校「生徒数」  
明治21年（1888）10月

級 別	人員(男)	人員(女)	合 計
1	62	115	177
2	34	44	78
3	32	30	62
4	50	23	73
補習生	11	1	12
合計	189	213	402

日々出席者数、平均201人（出席率50%）

明治半ば、学制制度も浸透したとはいえ学徒の出席率はなかなか高まらなかった。その原因は、勉強ぎらいもあつたであろうが、欠席者の多くは、家の貧しさから生じる稼業の手伝いなど、労働のためであった。

明治21年（1888）12月末の授業料等差表  
単位：人

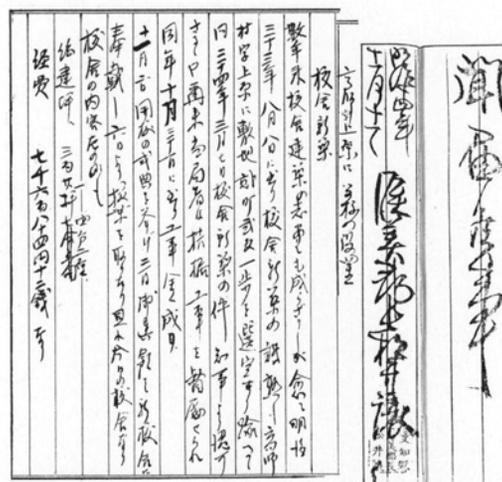
金五銭以下	金十銭以下	金十五銭以下	合計
154	240	8	402

そして、明治25年（1892）、「高師尋常小学校」と改称した津森の学校は、明治26年（1893）には「高等科」を併設して「高師尋常高等小学校」になり、植田村や野依村の学童をも合わせた広域の学徒が通う学校となった。そこに多くの優れた教師を迎えて、渥美郡の中心校としての役割を果たすようになった。そして、明治34年（1901）、現在地「上原」（現在の野上町字上原）に移転するまで、多くの俊英を育てていったのである。

## （2）「現在地・上原」に移った高師小学校

明治34年（1901）11月2日は、「高師村字上原」（現在地）に「高師尋常高等小学校」が新築され、移転した日である。この日は、

当時においても、また、現在の高師小学校にとっても記念すべき日であり、100年後の平成13年（2001）、高師小学校は、移転100周年記念行事を盛大に行ったほどである。



新築、開校当時の記録（学校沿革資料）

新天地に移った高師尋常高等小学校は、時節に合わせ施設設備を充実させながら、教育勅語（明治23年発布）を基本にすえ、明治の教育をますます充実させていった。それともなって、村の学校教育支援は、財政面でも大きな位置を占めるようになった。

一方、学校も村の行事や定着してきた「儀式」（天長節、紀元節など）を通して、村民との関わりを一層深め、地域の文化活動の中心的位置を占めるようになっていった。

その頃の学徒は、当時としても伝統的に「読み、書き、そろばん（計算）」を中心とした学習をしていたが、特に、手紙の読み書きができることが重要視されていた。また、修身教育も重要視され、明治社会に生きる人としての規律正しきや礼儀正しきも厳しく教えられていた。

しかし、時代の進展は、新しい学問（例えば、地理、歴史、物理、科学、博物など）が学徒たちの履修課題に加わり、次第に多



教科書の例

くなっていく学習科目への取り組みは、学徒にとってますます厳しいものとなっていった。

このころの学校では、年に2度の内試験と年1度の本試験が実施され、その累積結果が学年度末に教室の廊下に掲示された。そのことには学徒たちは小さな胸を痛めたという。

明治中期の小学校の〈小試験判点表〉に見られる学習科目

初等科…修身、読方、習字、算術、唱歌、体操

中等科…修身、読方、習字、算術、唱歌、体操、地理、歴史、図画、物理、裁縫（女）

高等科…修身、読方、習字、算術、唱歌、体操、地理、図画、博物、化学、生理、幾何、経済（男）、裁縫（女）、家事（女）

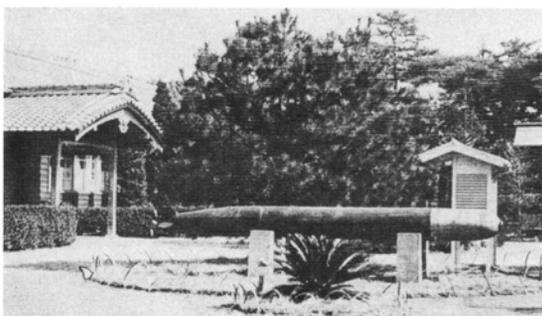
大正14年（1925）になると、高師尋常高等小学校には、さらに「青年訓練所」と「青年学校」が開設されたので、そこに学ぶ学徒は、福岡、磯辺、大崎、野依、植田などの村々からも通ってきた。



渥美郡青年幹部生

昭和7年（1932）、高師村が豊橋市と合併したので、高師尋常高等小学校は、豊橋市の小学校の仲間入りをした。そして、このころから次第に戦争色を濃くしていく国の歩みに、学校の様子も大きく影響されていった。

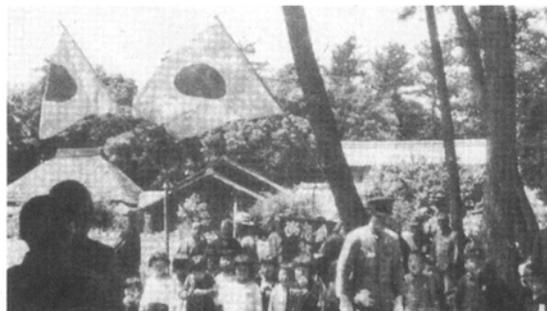
当時、学校には、国の方針で現役の軍人が常勤して学校経営に加わっており、また、校舎の内外には日清、日露の戦争の捕獲品や兵器など、戦争を賛美する品々が展示されていて、学徒の生活意識の中にじわじわと戦争色が浸透していった。



玄関前の「魚型水雷」 昭和9年（1934）撮影

昭和13年（1938）には、「国家総動員法」が公布され、学徒の学習に農作業時間が組み込まれて、開墾作業やいもさし、いもほり作業に駆り出されるようになった。

また、通学団組織が強化されたり、少年消防隊や青年団組織が結成されて、戦勝祈願の神社参拝や出征兵士の見送りや出迎え、兵士への慰問文作成等々の活動が、それぞれの組織に課せられ、非常時の銃後を守る戦士としての役割を担わされた。



兵士を送る子供たち

昭和16年（1941）になると、「国民学校令」が公布され、小学校は「国民学校」と改称され、「国民学校ハ、皇国ノ道ニ則リテ初等普通教育ヲ施シ、国民ノ基礎的錬成ヲ為スヲ以テ目的トス。（国民学校令、第1条）」として、戦時体制の中に組み込むため、教科が統合され教育内容も改められた。初等科の科目は、「国民科、理数科、体錬科、芸能科」に、高等科は、「国民科、理数科、体錬科、芸能科、実業科」となった。

学校では、戦争への協力のために、日々軍事教練のような学習活動が行われたり、出征兵士の見送りに参列させたりした。また、学徒は、食料の増産のために農作業にかりだされるなど、次第に本来の学校生活ができなくなっていった。



兵士ゴッコをする子供たち

そして、戦況が厳しくなった昭和19年（1944）から20年にかけては、上級生たちは、学徒動員とって授業を停止して軍需工場へ働きに行くようになり、下級生たちは、学童疎開とって戦災の少ないと考えられる田舎へ、家や家族と離れて暮らすようなこともあった。

こうした不安と苦しみの続くなか、昭和20年（1945）8月、国民学校と学徒は、終戦をむかえたのである。

### （3）新制の小学校がスタート

#### ①戦後間もないころの高師小学校

戦争で豊橋市街は殆ど焼け野原となったが、高師国民学校は戦火をまぬがれ、戦前と殆どかわらずに残った。そして2学期を迎えると、戦争に駆り出されていた先生も学校にもどって来て、学習がはじめられた。変わったところは、玄関脇にあった魚雷や校内に展示されていた銃や帯剣など、戦争賛美の品々を取り除かれたことである。

学習の内容も教科書も大きく変わった。地理、歴史、修身などの教科がなくなるとともに、教科書の中の戦争に関係のある箇所をすべて墨で黒くぬりつぶして使うことになった。終戦後、日本は新憲法のもと、教育基本法や学校教育法を決めた。そして学校教育



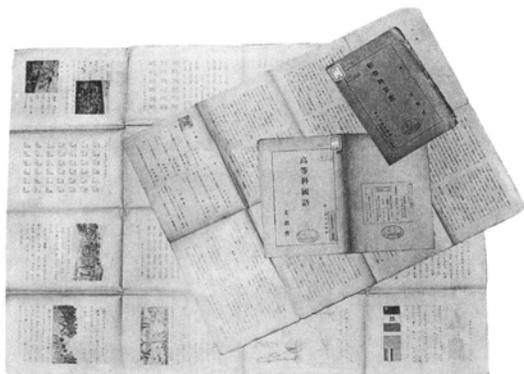
明治からの伝統ある校章「高師」

の機会均等、9か年の義務教育、男女共学制など民主教育を基調とした六・三制を昭和22年（1947）4月に発足させた。

学校は、「国民学校」から「豊橋市立高師小学校」と改まり、6年間義務教育になった。同時に3か年の義務教育となった新制の中学校も発足し、廃止された小学校の高等科や青年学校も吸収された。その時設立されたのが、現在の豊橋市立南部中学校である。

しかし、新制度へと生まれ変わって高師小学校となったが、校舎をはじめ施設設備は戦前と少しも変わらず、児童数の増加も加わり、教室などが足りない有様であった。また、新教育制度への急な変革と戦後の物資の不足のため、児童の使う教科書も間に合わず、新聞紙用の紙に印刷された「パンフレット教科書」（当時そう呼ばれていた。）が、学習に使われた。それは分冊方式で、印刷した一枚紙を折りたたんで切りそろえて綴じたものであった。

このように物資不足の中に新教育は出発したが、それでも、自由と平和な日々の生活を実感しながら、新しい社会の建設に夢と希望を抱いて、人々も学校も新しい人間像を掲げた教育に向かって進んでいった。



パンフレット教科書

しかし、物資の不足は、なかなか解消されなかった。児童のなかには、学校へ昼食を持って行けない子も少なくなかった。そうした時、昭和22年（1947）ミルク給食が始まり、昭和

26年（1951）には、パン、ミルク、おかずと揃った完全給食開始へと進んで、児童の生活と学習環境は、一つ一つと徐々にではあったが改善され向上していった。

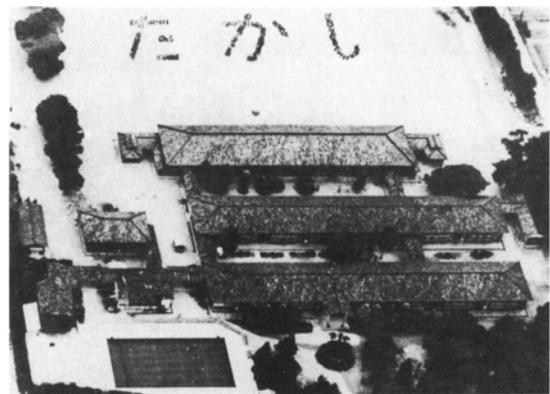
## ②高師小学校の現在までのあゆみ

戦後の混乱期をPTAや地域住民の支援と協力のもとに乗り越えた高師小学校は、再び地域教育の中心、おらが学校として立ち上がった。その原動力と考えられるものは、“郷土のこどもは我らの手で”という明治以来培われてきた校区の伝統の力といえよう。

この高師小学校の戦後から現在までのあゆみには、たくましい進展の足跡がうかがえる。特徴的なことは、積み重ねられた施設設備の充実とたゆまない新しい教育の追求、大規模化ゆえの学校分離である。次にそれらの事を取り上げながら足跡をたどってみたい。

まず、学校の施設設備の充実に関する主なものとして、

- ・昭和36年（1961） プールの建設
  - ・昭和44年（1969） 体育館の建設と校旗、校歌の作成
  - ・昭和46年（1971） 希望の塔、体育遊具の設置
  - ・昭和40年代の後半 校舎の増改築
  - ・昭和51年（1976） 高師山の岩石園づくり
- などがあげられる。これらのことは、児童の



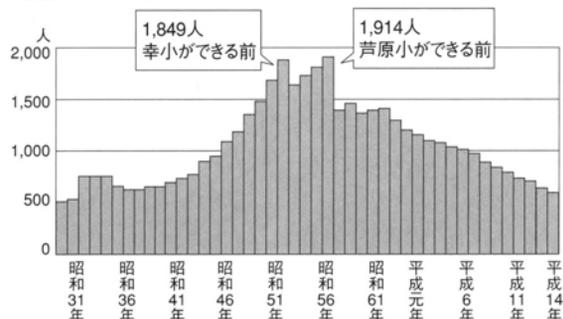
昭和39年（1964）の高師小学校全景

学校生活はもちろんのこと、地域での生活にも大きな変化と影響をあたえた。

そうした学校の充実の過程で、工業化や市街化など地域の発展も加わり、児童数の増加が著しくなっていき、昭和40年（1965）頃500名前後だった児童数が、昭和50年（1975）頃には1,800名を越えるまでになり、市内でも最大規模の小学校となったこともあって、

- ・昭和30年（1955）天伯小学校が開校、分離
- ・昭和49年（1974）高師台中学校が開校  
南部中学校から分離
- ・昭和52年（1977）幸小学校が開校、分離
- ・昭和56年（1981）芦原小学校が開校、分離  
などが続き、その時期の児童たちは、仲良しだった級友との別離をよぎなくされたのである。

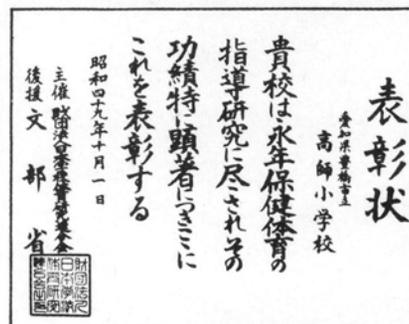
児童数の変化



そうした学校の動きの中にあっても、高師小学校の教育活動には、明治以来の模範校としての伝統がいきづいている。新しい教育、新しい人間像を求めてのたゆまぬ努力が、教職員をはじめPTAや地域の人々によってはらわれてきたのである。その歩みの幾つかを取り上げてみよう。

高師小学校の教育活動

昭和30年 (1955)	「教育評価」の研究を発表
昭和40年 (1965)	「豊かな表現力を育てる語句の指導」の研究を発表
昭和47年 (1972)	「豊かな活動力をめざして自主性を育てる体育学習」の研究を発表
昭和49年 (1974)	体育優秀校として日本学校体育連合会より表彰を受ける
昭和55年 (1980)	「おかあさんこっち向いて」の小冊子をPTAが発刊
昭和59年 (1984)	「特別活動」の研究を発表
平成4年 (1992)	「豊かな心を育てる活動推進事業」を市の教育委員会より委嘱される
平成5年 (1993)	PTA新聞「たかし小僧」が中日新聞社賞受賞
平成11年 (1999)	「学校経営」の研究を委嘱され、13年に発表



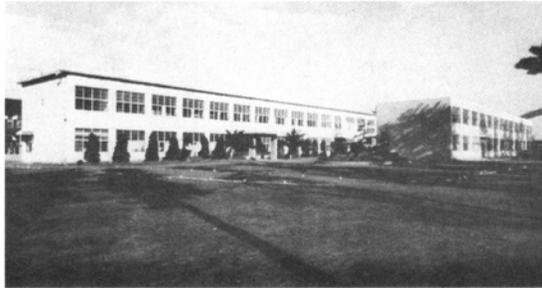
日本学校体育連合会より表彰

このように明治以来の伝統を引継ぎつつ、平成13年（2001）、高師小学校は現在の地に移転して100年を迎えた。その年、移転100周年を記念して、記念式典や校区体育祭などが執り行われた。

今年、市制100周年をむかえた今、高師小学校は、児童数761名〔25学級〕、教職員36名（平成18年5月1日現在）の規模の学校としてあるが、未来にむかって、伝統を引継ぎつつ、どのように変わっていくであろうか。

#### (4) 南部中から高師台中 そして本郷中学校へ

##### ①南部中学校、そして高師台中学校



南部中学校

戦後の教育改革により、3年間義務制の新制中学校は、昭和22年（1947）県下一斉に開校し、同時に豊橋市立南部中学校は開校した。そして、高師小学校の高等科生や青年学校生が吸収されていくことになった。

開校したといっても当初は、校舎もなく、小学校の教室を間借りして授業が行なわれていたという。これ以来27年間、高師小学校の卒業生が進学する中学校となった。そして年月を経るとともに、市の人口増加や郊外の市街化などいろいろな現象がからんで生徒数が急増したため、昭和49年（1974）4月、豊橋市立高師台中学校が開校した。



高師台中学校

そして再び高師小学校の卒業生は、進学先がかわることになった。この時以来高師台中学校へは、高師小学校と天伯小学校の児童生徒が進学することとなった。

##### ②本郷中学校



本郷中学校

続いて、昭和61年（1986）4月、豊橋市立本郷中学校が開校した。高師台中学校からの分離によるものである。狭い意味での高師地区にやっと中学校がやってきたとの思いがする出来事である。

本郷中学校の開校時の生徒数は、男子539名、女子526名の合計1,065名で、学級数は、3年生8クラス、2年生8クラス、1年生9クラスの合計25クラスであった。分離し開校した学校にもかかわらず、大規模な学校としての出発であった。

創立20周年を迎える平成17年度（2005）は、男子254名、女子250名の合計504名で学級数は、3年生5クラス、2年生5クラス、1年生4クラスの合計14クラスの学校となっている。

学校のシンボルである校章は、郷土高師の地区に昔から多く見られる鳥「しらさぎ」をモチーフにして、夢をもって大空にはばたいほしいとの願いから、2羽のしらさぎが描かれている。

本校は、開校当初から、地域と一体となった学校づくりを進め、学習活動や部活動で、多くの実績を残してきた。学習活動では、平成2年度（1990）に、愛知県技術家庭科研究大会が本郷中学校で開催され、ロボット作りをはじめ、最先端の学習内容が発表された。

平成4年度（1992）には、豊橋市教育委員会より「生徒指導」の研究委嘱を受け、「心を育てる生徒指導」をテーマで研究発表した。

体験ユニット活動と呼ばれる活動では、「お

年寄りに学ぶ」や「障害を持つ人との出会い」の学習を初め、「郷土発見のウォークラリー」などの活動がおこなわれた。

平成14年度（2002）にも、豊橋市教育委員会より「学習情報」の研究委嘱を受けて発表した。コンピュータを活用した、テレビ会議のシステムの実演を初め、校内に張り巡らされたLAN（ローカルエリアネットワーク）を活用した、各教科の授業を発表した。

平成16年度（2004）からは、「誰にも優しい温かさ」と潤いのあるNEW本郷中づくりを合い言葉に、新たな気持ちで学校づくりを進めている。「本郷校区クリーン大作戦」や「本郷校区地域自主防災活動」は、学校と地域、健全育成会が一体となった大規模な活動となっている。また、PTAは、「夏休みバザー」や「文化祭のPTA企画」などの収益を通じて、20周年記念式典に、図書館用のカウンターや各部への「部旗」、ロックソーラン隊の応援旗などを寄贈し、活発な学校づくりに貢献している。本郷中学校の今後の進展に期待を寄せ、応援しながら見守っていききたい学校である。

### （5）幼児教育の充実

戦前に比べ、戦後の教育の特徴の一つに、小学校入学前の教育の普及がある。

それは、幼稚園や保育園による幼児教育への国民の認識が著しく高まって、制度上の整備とともに広く普及したことによる。



円通寺保育園

昭和22年（1947）の「学校教育法」で、幼稚園は、満3才から小学校に入学するまでの幼児を保育し適当な環境を与えて、その心身の発達を助長する学校とされた。そして、教育の領域として、健康、社会、自然、音楽リズム、絵画制作の領域に分け、幼児教育の目的を達成するようにした。

豊橋市においても、昭和30年代の半ばになると、市内各地に幼稚園や保育園が開設された。高師校区周辺でも、下記に示すように、30年代までにいくつかの幼稚園、保育園が開設されて、就学前の幼児の入園率は、ほぼ100%になっていた。そして、幼児教育を受け、集団生活を経験した幼児が、小学校に入学するのが普通の時世となった。

また、この時期、幼児からの才能開発にも関心が高まり、私塾の開設も著しくなっていたことも忘れてはならない。

#### 校区周辺の幼稚園・保育園の開設

単位：クラス数

	開設年月	開設時	現在
曙幼稚園	昭和28年（1953） 9月	2	5
円通寺保育園	昭和29年（1954） 4月	2	8
高師東保育園	昭和30年（1955） 8月	2	10
高師西（芦原）	昭和48年（1973） 4月	4	9
高師台幼稚園	昭和53年（1978） 4月	5	7

### （6）社会教育の充実

#### 市民館の活動

高師校区には、高師小学校前に「高師校区市民館」、浜道町に「本郷地区市民館」が市の施設として設置されている。そして、地域の人々に親しまれ、よく活用されている。

高師校区市民館は、豊橋市が、昭和55年度（1980）から市内の各小学校単位の学区に1館をとの計画で、設置を進めてきた市民館の

一つで、昭和56年（1981）5月に開館した。

本郷地区市民館は、これも、昭和49年度（1974）から市内各中学校区に1館をと、設置が進められた市民館の一つで、平成元年（1989）3月に開館した。

両館とも、館内に集会室をはじめいくつかの個室が整えられていて、多様な文化活動ができるように配慮されいろいろな設備が用意されている。

この市民館開設の主な目的は、

- ①地域の住民が自主的に企画する文化、教養、レクリエーション活動ができる施設とする。
- ②子供から老人までが、それぞれ気楽に集まったり、同好のクラブ活動ができる施設とする。
- ③地域の人々への行政サービスセンターの役割を果たす施設とする。

などで、この目的は、地域住民にもよく理解され浸透していることである。

したがって開館以来、市民館では、市民館主催の活動や、地域住民が自主的に企画運営する活動が、絶え間なく行われている。活動する地域住民の中には、自主グループを作ってさらに活動を継続していこうとする動きも数多く生まれている。

主な活動として、〇〇セミナー、講座、講習会、〇〇教室、〇〇の会、クラブ活動などがあげられる。

この他にも校区や小中学校と協力して実施しているものとして、「地域いきいき子育て事業」や「市民館祭り」等々があり、地域に貢献している。

これらの活動計画の予定は、それぞれの市民館から回覧板として、「市民館だより」や「しらさぎ」が月々発行され、地域の人々の情報源となっている。

市民館は今、子供たちから高齢者まで幅広

く利用されているが、なお一層、地域のコミュニティセンターとしての機能の向上をめざし、

- ・地区の高齢者の利用を促進する。
- ・小学校入学前の幼児の育成活動をする。
- ・地区総代会と連絡を密にして、文化的行事の推進を図る。
- ・市民館で活動するグループの援助をする。
- ・市の行事に協力する。
- ・町内の諸活動の会場にと協力する。

などをかかげて努力しているが、地域の人々のさらなる理解と活用が広まるようお願いしている。

## 2. 信仰と文化

### (1) 守り守られ—鎮守様

私たちの郷土には、古くから村の鎮守として人々に崇敬され、大切に守り継がれてきた多くの神社がある。そのいくつかを紹介し、次世代につなぎたい。

#### ①高蘆神明社

高師本郷町字本郷に鎮座。



高蘆神明社

創立は、白鳳3年（674）とされ、高足村が伊勢神宮の御厨（神宮の領地）であった頃、高足御厨の繁栄を祈って伊勢神宮（内宮）よりお迎えしたとされている。

この神社は、昔から高足村の鎮守として崇

敬され、村内5社の筆頭格として高足惣社神明社ともいわれたこともあった。

特に、江戸時代、徳川氏の厚い保護を受け、3石の社領を認められていた。

終戦直後の食糧事情の悪かつた時期、当社は、祭礼日や正月の行事として村人にご馳走をふるまったり、また、青年団による村芝居や巡業一座による演芸を催したりして、村民家族の慰安に貢献していたこともある。毎年、氏子によって10月の例祭を中心に多くの神事が執り行われ、感謝と祈願の祈りが捧げられている。

## ②逆戈神社

浜道町字芝切に鎮座。



逆戈神社

創立は、口伝ではあるが白鳳年間（672～685）とされている。そして、文治4年（1188）に再興され、八逆戈大明神やちほこと言われた時期もある。

源頼朝が当社を篤く崇敬して神領を寄進した頃は、八逆戈大明神やちほことされていた。後に、石巻明神の分霊を合祀して逆戈大明神と改称している。

当社には、現在、源頼朝公の駒止めの石、公による寄進の鞍が保存されている。このように、頼朝との縁が深い当社は、古くから多くの武門武将に崇敬され、特に吉田藩主には、篤く崇敬されて8石の受領が認め

られていたほどである。

当時の社殿は、立派で大きく、また境内も広大であったという。

例祭は10月に行われ、祭りや正月の行事に弓を奉納する神事がおこなわれる。

## ③日吉神社

高師本郷町字東上に鎮座。



日吉神社

創立は、正安2年（1301）で、併祀祭神からみて滋賀県坂本の日吉大社と白山社かみじょうとに縁をもつ神社で、高足村の守護神として勧請したらしい。

江戸時代の中期より社殿の造営、文化2年（1805）修復、天保10年（1839）造営を重ねながら社運増大して高足村の5社の一つとなった。

明治20年（1887）、浜道町藪合にあった社地を現在地（東上9番地）に移し、大正13年（1924）には多くの社殿を新築している。

古老の言い伝えによると、当社には、神前への神水供、おこもり堂での語り明かし、お神酒5升の奉納などの特殊な神事が、氏子によって引き継がれていたとのことであるが、現在は、その神事に使われた祭器具類が残されているが、その神事は行われていない。

例祭は、10月とされている。

④その他の神社

以前、広域だった高師村の区域には、さらに次のような神社があるので、列挙しておきたい。

その他神社一覧

社名	所在地…創立年 ◇由緒・伝来事象
天伯神社	畑ヶ田町字畑ヶ田…正和元年(1312) ◇祭典の宴の膳に「冬瓜のなます」が添えられるという伝承がある。
高師神社	西高師町字西浦…明德3年(1392) ◇はじめ白山社であったが、1722年より進雄命を祀る社となった。
逆鉾神社	芦原町字芦原…明暦3年(1657) ◇遠州利木村の逆鉾神社の分霊社
すすのお 進雄神社	藤並町字藤並…寛文9年(1669) ◇尾張津島地方の住民の氏神、天王様を祀る。
神明社	高田町字高田…明治44年(1911) ◇古くは宝地道の地に高芦神明社(高師本郷の社)の謠拜所としてあったが、住民の居住地移転で現在地に造営された。
高師神社	高師町官有地…昭和23年(1943) ◇逆鉾神社(芦原)の分社として祀る。
御幸神社	西幸町字古並…昭和24年(1949) ◇岩西開拓団の守護神として創立。砥鹿神社、諏訪神社、熊野神社、津島神社との所縁がある神社。毎年、1月4日に催される特殊神事「花祭り」はよく知られている。

このように、多くの神社が存在することは、高師の地に住民が、古くから定住したことと、自らの出身地や信仰を大切に、子孫代々揺るぎなく伝承し守ってきた高師の人々の誠実で逞しい生き方を物語るものである。

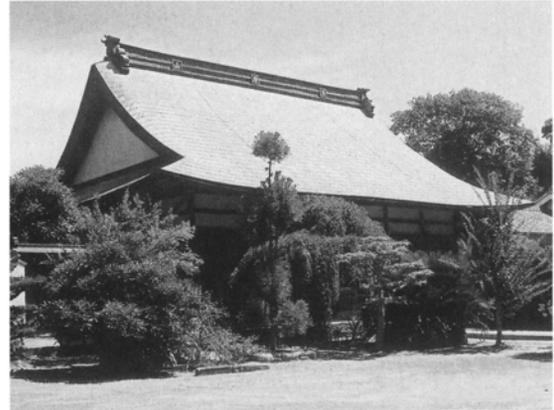
(2) 先祖供養と、心のよりどころ

—お寺さん

郷土高師には、多くの神社とともに、古くから村人の暮らしや文化の中心となってきたいくつかの寺がある。以下それらを紹介する。

①円通寺

寺の所在地は、上野町字上原である。



円通寺

創建は、建武2年(1336)とされ、開基は清原氏で、開山は清拙禅師と伝える創建縁起がある。それに由ると、

「当村に村人清原氏夫妻あり。老いるまで子がなかったため、先祖供養にと一寺の建立を立願。寺の開山にふさわしい名僧との出会いを願い、岩屋観音に17日間参詣。満願の日、「今日西方より鎌倉に下る僧に会え」とのお告げを受け、海辺に出て待つ。京より鎌倉の建長寺へ向かう清拙禅師と出会う。旅の途の禅師は、「鎌倉に着き次第送り届ける…我が寿像…を掲げて開山せよ」と旅立つ。後に届いた寿像一軸を以て開山した」とある。

それ故、寺の正式名称は、清原山円通禅寺といい、臨済宗(禅宗)の寺である。

今川氏縁の雪斎長老の勧告により天文18年(1549)妙心寺派となり、以後、今川氏や後の徳川氏に厚く保護され、寺領や家禄を与えられた。ことに、古くから当寺の観音様(伝・安阿弥作)には、武家をはじめ多くの庶民の厚い信仰が寄せられてきた。

また、文久期(1861頃)から明治6年(1873)まで寺子屋を開設し、村の教育や文化の中心となっていた寺としても知られている。

## ②紫雲寺

寺の所在地は、高師本郷町字榎である。



紫雲寺

創建は、文安5年(1448)で、開基は村中(村民)で、開山は行基菩薩と伝えられている。寺の正式名称は、高足山紫雲寺という。

当初は、紫雲庵としてはじまったが、創建時より東観音寺(開山が行基菩薩)との縁が深く、途中荒廃していたのを再興して、永禄7年(1564)に東観音寺の末寺としたようである。

昭和27年(1952)、従来の寺号紫雲庵を紫雲寺と改め独立し、臨済宗妙心寺派に属して現在に至っている。当寺の本尊の地藏菩薩は、観音菩薩と共に檀家信徒によく親しまれ、供養が続けられている。

## ③高林寺

寺の所在地は、西高師町字船渡である。



高林寺

創建は、天正元年(1573)で、開山は、生誉是念。開基は、山本氏の先祖である。当初の寺号は、谷響山高林寺であったが、現在の正式名称は、小谷山高林寺といい、浄土宗の寺である。

嘉永期(1850頃)から明治6年(1873)まで寺子屋を開設していたり、明治の半ばごろの住職も村の青年に漢字を教えていたことがあるなど、村の教育や文化の中心となっていた寺である。当寺には、寺宝ともいえる「涅槃像(掛け軸)」「山門」「法螺貝」があり、“高林寺にすぎたるもの3つ”としてよく知られている。

## ④薬師堂

お堂は、浜海道の辻(現在の浜道町字桜)にあった。

創建の年次も、廃寺となった年次も不明である。現在は、石仏群だけが残っていて、昔を偲ぶよすがとなっている。

明治15年(1882)から19年(1886)にかけて、高師学校の分教場がおかれたとの記録がある。

## (3) 郷土の人物探訪

私達の郷土高師には、語り継ぎたい多くの偉人がいる。その中の幾人かを特に取り上げて紹介し、後世まで語り継ぐ備忘録とする。

## ①庄屋「源吉」

円通寺では、毎年、旧暦の7月1日に校区の人々によって庄屋源吉の追善供養が行われている。また昭和36年(1961)3月、庄屋源吉頌徳碑が、校区の人々によって境内に建立されている。これは、源吉という人物が当時の村民のために偉大な功績を残したことを物語っていると思われるが、確実な資料が残されていないので、源吉の事業がはっきりと

できないのが残念である。ここでは、古老の口伝によって残る源吉の功績を記すこととする。



庄屋源吉碑

源吉は、宝暦6年(1752)高足村に生まれ、18才の時、村民の推薦を受けて庄屋となった。その頃は、天災続きで大旱魃かんぱつ、大凶作が村民を苦しめていた。源吉は、他の村の庄屋らと共に、吉田藩に年貢を減らしてもらうよう嘆願したが、聞き入れられなかった。それどころか、藩は、庄屋たちの嘆

願を強訴はつと(法度破り)として厳罰(死刑)をもって脅し、取り下げさせようとした。

他の村の庄屋たちは、怖れて引きさがつたが、源吉だけは、なお執拗に嘆願を続け、安永3年(1774)の年貢軽減に成功したのである。しかし、度重ねの強訴と、検査役人を欺いた(仮病を装ったり、不作の田畑だけを見せるなど)罪で、源吉は死罪を命ぜられ、幽閉された。

村民は、吉田の主だった寺の僧侶に、はたらきかけ、こぞって源吉の助命運動を起こして藩に嘆願したので、源吉は、死罪を許されることになった。

しかし、源吉は、長い牢獄生活から重い病気になる、25才の若さで亡くなった。

彼がまさに息を引き取ろうとする時、「もし、もう3年寿命をのばしてくれたならば、畑の租税を減らしてもらって、諸君の子孫を一層幸福にできたであろうに、それができなかったのが、心残りだ。」と言い終わって目

を閉じたという。そこは、浜道の神社に近い舟原というところであった。墓は芦原町、月桂山奥谷寺にある。

## ②吉原弥次右衛門と祐太郎



吉原祐太郎

吉原氏は、芦原新田の開拓に功績のあった家柄である。

芦原は、元は梅田川の河口の流れの中にあつて、沼のような状態で葦が生い茂り、荒れた沼地のようなところであつた。

寛永年間(1624~1643)、時の吉田藩主は、この地を開拓しようとしたが、たびたびの津波や洪水で失敗し、その後、永らく放置されたままであつた。

明暦2年(1656)、遠江の国の人、吉原弥次右衛門重次は、一族と相談して、藩主小笠原忠知の許可を得て、この土地の開拓に着手した。しかし、この土地を入会として共有している村々の大反対に合い、数々の妨害も受けたうえ、津波にもあつて、第一次の開拓事業は失敗した。

第2世弥次右衛門が、その事業を受け継ぎ、いろいろな妨害を除きながら、新しい川をつくり、古い川を埋め、たびたびの堤防の破壊にも屈せず、元禄3年(1690)、35年ぶりに熟田30余町歩、畑20町歩を完成させた。この田畑が芦原新田と名付けられ、ここに芦原村が始まったのである。

吉原祐太郎氏は、弥次右衛門の子孫に当たり、万延元年(1860)芦原村の生まれで後に、政界に出て愛知県会議員となり、続いて衆議院議員を2期勤めた人である。

この地方においては、渥美電気鉄道初代社長などを歴任し、東三財界の長老として、ま

た、愛知の政界財界の重鎮でもあった。

特に、土木水利事業、農・養蚕業、初等教育等々の推進に大きく貢献した人、常に先を見通した構想をもって事業に当たった人として、たたえられ語りつがれている。

### ③柴田文一



柴田文一

現在の農業協同組合（JA）は、農村の振興を目指す組織として、大正初年に発足した産業組合から、戦時中の農業会、戦後の農業協同組合と、時代と共に変化してきたが、その農業協同組合の前身である高師産業組合の生みの親が、柴田文一氏である。

柴田文一氏は、明治19年（1886）藤並村の生まれである。氏は、村役場に勤めるかたわら、土木委員として大井用水工事の推進をはじめ、早くから産業組合の必要性を説き、その設立に力を注いだ人である。そして、産業組合が設立の運びとなった大正2年（1913）、初代組合長となり、以後10年間自宅を事務所として提供するなど、組合の進展に大いに貢献された。そして30年にわたり、組合長理事の要職も勤めるなどの実績に対して、自治産業功労者として表彰を受けられたのである。

氏は、特に貯蓄の増進や組合発展の具体策の指導に尽力されたと、尊敬をもって語り伝えられている。

後年、組合敷地の一角に氏の記念碑が建立されている。

### ④彦坂幸太郎

「雲に聳える段度山、波は静けき渥美湾、外に万里の海を見て、内に沃野の富を占め、



彦坂幸太郎

流れも清き豊川や、矢作大平<sup>みお</sup>滞長し」の歌詞で歌われるこの歌は、「三河男児の歌」といい、師範学校に学んだ三河出身の人々に声高らかに歌われ、また、卒業後教員となった各

先生方を通して三河の各地に伝え広められ、歌う人々の心意気を奮い立たせた歌である。

この歌詞の生みの親が、彦坂幸太郎先生である。

氏は、明治6年（1873）、渥美郡高根村（現在の西七根町）に生まれて後、高師本郷の彦坂家の養子となった。

氏は、明治28年（1895）愛知県第一師範学校（現在の愛知教育大学の前身）を卒業し、豊橋のいくつかの小学校教員を勤めている。

さらに明治38年（1905）、東京高等師範学校（現在の筑波大学）に学び、卒業後、母校である愛知県第一師範学校の教員となった。この「三河男児の歌」は、その頃の作で、歌詞は10番まであり、その内容は、大変格調が高いと評され、親しまれている。（高師風土記 P319参照）

## （4）郷土に残る昔話

### ①大玄法師と狐



高師風土記より

昔、大玄法師というお坊さんが高林庵に住んでいた。ある時、法師が南の浜に行くのに野依を過ぎて天伯原にでると、狐がたくさん遊んでいました。そこで法師はいたずらに、法螺貝を取り出して、突然吹き鳴らすと、狐はびっくりして、逃げ散ってしまいました。

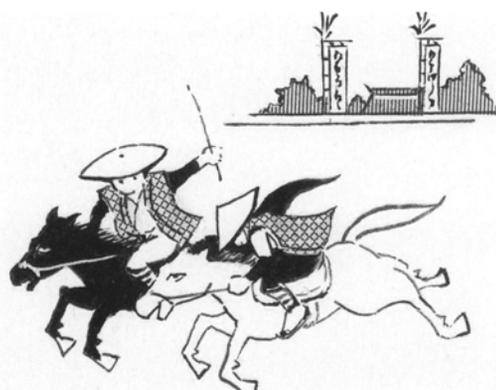
帰りにこの原にくと、急に日が落ちて辺りが真っ暗になり、一步も進むことができません。すると、暗やみの向こうにポツンと一つ灯りが見えるので、行って「泊めてくれ」といいました。すると、一人の老婆が出てきて、「今夜は、家に死人があり、隣家に告げてくる間、留守番を頼む。」と行って出ていきました。すると、家の片隅から、亡者が起きだしてきて、大玄に近寄ってきました。おどろいた大玄は、次第に後へ退き、とうとう谷川へ落ちてしまいました。すると、ぱっと真っ昼間になって、高林庵に帰ることができたんだとさ。この様子を、田植えをしていた村人が見ていて、大変怪しんで、後々までこの話を不思議な話だとして語り伝えたんだと。

## ②逆戈神社の神事・・・「たたき祭」

浜道町の逆戈神社では、旧暦の10月16日に、源頼朝の時代の荒武者行事にならい、高師村を東西に分けた地域から、それぞれ馬一頭と騎士を出しての競馬「神事」が行われていた。

祭の当日、古式にのっとった「陣笠、手こう」で身を固めた騎士は、頼朝公にならって、駒止の石の傍らの榊に馬を繋ぎ、神社に行事の無事を祈った後、乗馬して神社の西の馬場を北進し、旧二川街道を西に向い、西高師の白山社（現・高師神社）の前まで駆けていった。そして社の前の川で身を清め、再び古式の姿で逆戈神社まで駆け戻り、榊に馬を繋いで神社に無事のお礼参りをするのである。

しかし、この神事は、逆戈神社の「たたき祭」ともいわれる。それは、大勢の参拝者が長い



競馬神事

青竹を持って道の両側に並び、走る騎士と馬の区別なく、手にした青竹で叩くことが許されているという祭りでもあるからである。もし、騎士か馬を叩くことができれば、その年の災難をまぬがれると信じられているので参拝者は、真剣に青竹を振り回したという、誠に荒い神事であった。騎士や馬は、行きも帰りも同様に青竹で叩かれたというが、受けた傷は境内の神泉で清めると、たちどころに治ったといわれている。

この神事は、明治3年（1870）、東高師の小林勇作と西高師の何某が騎士を務めた「たたき祭」を最後に、行われなくなった。騎士を務める若者が続かなくなったため、三河地方のめずらしい神事の一つがそれ以来中止になってしまったことは、誠に惜しいことである。

〈浜道町 小林作次 談〉

## (5) 昔のあそびとおもちゃ…（温故知新）

21世紀の今日、いまさら「昔の遊び、おもちゃ」を取り上げ、記録に留めても、あまり役立つとは考えにくいですが、それらは、人々の素朴な生活の中で生まれ、親から子へ、先輩から後輩へと、代々継承されてきた貴重な文化遺産である。

しかし、それが今、子供たちの身の回りから消えようとしているのも事実である。

技術革新の時代とともに、次々と新しく興

味深い遊びや玩具が開発され、商品化されて安易に手にしやすくなったことによるものであろうが、このまま消えていくにはまことに惜しく、この機会に記録に留め、「温故知新」のきっかけにでもなればと願うものである。

そして、次に紹介する昔の遊びやおもちゃから、「自然と親しむ子らの姿」「仲良く遊ぶ子らの歓声」「親子の暖かい対話」「先輩と後輩、友と友との優しい心の通い合い」などを感じ取っていただきたいものである。

昔のことだで、よく覚えておらんが、わしが小学校1、2年の頃、よく、藤つき、かまおとし、おしくらまんじゅうをやった。

冬には、こままわしをやった。金心棒という長い時間こまをまわす競争や、ぶっかけ、たたきごまなどもやった。ほかにも竹馬、なわとび、たがまわしもやった。

夏は、ため池や梅田川で泳いでばかりおった。

秋は、きのことりをした。まつたけ、しめじ、ねずみたけ、ぬのびき、しょうろなどをとった。また、山へ行くと、やますすぼ、こなべ、かみなりすすぼ、椎の実、山ももなど木の実を採って食べた。魚とりもよくやった。釣り、茶碗伏せで魚をとった。

椿の咲く頃、モチの木の皮でもちをつくり、目白（鳥の名）とりもした。

五月のころは、凧揚げをやった。一枚凧、奴凧、扇凧、けろり、田原凧、八つはななどの凧をあげた。

女の子は、お手玉（おじゃみ）や糸とり（あやとり）、おはじきをした。おはじきは、ながらめ（貝の名）、木の実（どんぐり、しいのみなど）、木たまを使ってやった。

その他、まり投げや鬼ごっこ、かくれんぼもよくやった。（明治25年生まれの古老の話）



こままわし

#### ◆遊びとおもちゃ、いろいろ

##### ○藤つき

遊び仲間が交互に、藤の実を地面に投げて、突き刺す遊びである。

##### ○ぶっかけ

地面に落ちないように、空中に浮かせたままのこまの心棒に糸をかけて回す遊びでたいへん難しい技が要求される遊びである。

##### ○かまおとし

長方形を真中で仕切り、陣地をつくる。14人位が2組に分かれ、お互いの陣地の隅に置かれた宝物（石など）を取り合う遊びである。相手の陣地に入っていて、指定の線から外に押し出されると、捕虜になるなどの約束事があった。

##### ○パンパン（パンキー）

やや厚手の長方形の紙で、大将、中將、少將、タンク、騎兵、間者など軍国調の絵を描いて絵札を作り、札相互の優劣をルールできめて一人ひとりが持ち、これと思う友を追いかけて体に触れ、お互いの絵札を見せ合って、ルールに従い絵札を取り合う遊びである。

また、長方形以外に丸い形のものもあり、それをお互いに地面に叩きつけて、相手の札を裏返しにしたり、相手の札の下に自分の札をすくい入れることができる、取ることができる。

○木の葉の面づくり

顔がかくれるほどの大きな葉(里芋の葉)を使って目の位置に穴をあけ、すすきの穂や松葉などでひげをつけ、かぶって遊んだ。

○穂の馬遊び

ちからしば、えのころ草などの草の穂を軽く握ったり緩めたりすると、穂は先の方へ動くというおもしろさがある。また、机の上に載せて机を叩くと動き回るので楽しめた。

○草ずもう(松葉ずもう)

2本1対の葉を組み合わせて引き合い、切った方が勝ち。この遊びでは、引き方にコツがある。松葉以外に、レンゲ草、しろつめ草などの花の茎でもすもうができる。

○花占い

キク科の花の花びらを1枚ずつ、「願い事の成否」を交互に唱えながら取っていく時、最後の1枚で、事の成否が決まる遊びである。

○花車(風車)

コスモスなど、菊科の花で風車を作るとよく回る。

○笹笛

笹の先、ススキ、ヨシなどの新しい葉を

ひき抜いて、一度ひらき、かるく巻き戻して、根元の方を吹くと、ピーとかプーという音が出る。

○きじなき笛

笹やヤブカンゾウの葉を、手のひらにはさんで吹くと、キジが鳴くような音が出る。

○すずめおとし

ひもつきの棒を立ててかごを持ち上げ、その下に餌をまいておく。すずめが餌を食べにきてかごの下に入ると、離れたところからひもをひいて棒をたおし、かごをふせてすずめを取るしかけである。



すずめおとし  
雀落し(ふせご)

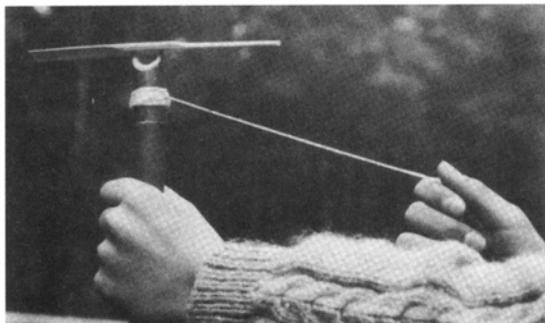
○竹ながし

竹で作った長さ15cm前後のたんざくを使って、手の平でにぎり空中に投げて手の甲に受けてとめて乗せ、次に、はねあげて再び手の平でつかむようにしたり、手の甲で受けたものを全部を裏か表にそろえるように手の甲からおろすという技の伴う遊びである。

○竹とんぼ

竹をけずって、プロペラを作り、心棒をしっかりとつけて飛ばす遊びである。他に、同じ竹とんぼでも、心棒を回転させ

てプロペラだけを飛び上がらせる方法もある。



竹とんぼ

○おはじき

貝や木の実など地面において、指爪ではじき、ぶつけ合う遊びである。遊び方はいろいろある。

○石けり

石を目標地点に正確に投げて落下させる。足でけり進んだり、跳び進んだりする動作がともない、左右の脚力を競うことになる。明治時代に外来したものである。

○たがまわし

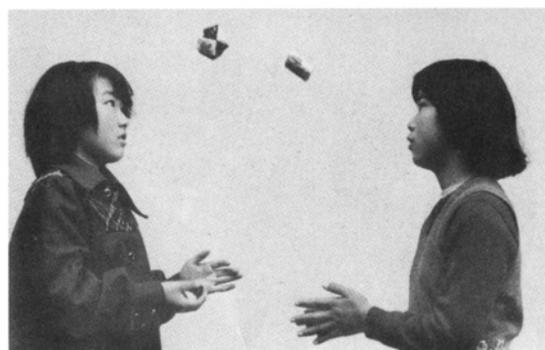


たがまわし

樽に使われていた竹製のたがを、ふたまたになった木の枝で押し回して遊んだ。自転車が普及してからは、たがの代わりにフレーム（車輪）を回すようになった。

○おてだま（おじゃみ）

女の子の遊びで遊び方も多く、遊び歌も多い。おてだまも2つ、3つから5つくらいまでが、普通の子の扱える数である。片手、または、両手で交互に次々と上に投げたり受けたりする遊びで、おじゃみの中に、はとむぎ（じゅずだま）や小豆を入れて遊ぶときに出る音も楽しんだ。



おじゃみ

○手まり

御殿まりのように、綿くずなどを芯にして、その上に糸をたくさん巻いて形を整えた。マリは座ってつくのが昔からのやりかたで、ゴムマリが普及するようになってから立ってつくようになった。手まり歌もさまざまで、古くから世の中のできごとや、芝居の筋書きを歌ったものがおおかった。

例えば「一番はじめの一宮、二また日光東照宮・・・」「あんたがたどこさ、肥後さ、肥後どこさ・・・」「てんてんてんまり、てん手まり、てんてん手まりの、手がそれて、どこからどこまで飛んでいった。」などがある。

○おしくらまんじゅう

壁や塀に大勢の子が寄りかかり、両端から真ん中へ押し合う。「おしくらまんじゅう、押されて泣くな」といいながら押す。真ん中の子がはじき出されると、押し出された子は、端の方へ並んで押す方へまわる。

以上、ここに紹介してきた「昔の遊びやおもちゃ」はすべて、昭和51年（1976）発行の「高師風土記」に詳細に記録されているものの再掲載である。その後ずいぶん時が経っているので、再び目にさせていただき、認識を新たにさせていただくことを期待して再掲載したものである。

## 旧跡



三十三観音

旧小松原街道沿い、毎年8月中旬供養祭が行われている。（浜道町）



道祖神

旧小松原街道、梅田川北堤、村境、浜道町字舟原、馬頭観世音他が、ひっそりとまつられている。  
このあたりは庄屋源吉終焉えんの地でもある。

## 参 考 文 献

- ・「高師風土記」…………… (高師風土記刊行委員会・発行)
- ・目で見る「教育100年のあゆみ」…………… (文部省・著)
- ・ウォッチング高師 …………… (高師小学校・発行)
- ・学校経営案 (H12年版) …………… (高師小学校)
- ・地区市民館だより「しらさぎ」…………… (本郷地区市民館・発行)
- ・高師校区市民館だより …………… (高師校区市民館・発行)
- ・豊橋の町名の変遷 …………… (吉川和明著 豊橋文化協会・発行)
- ・豊橋市南部農協二十年史 …………… (豊橋南部農業協同組合・発行)
- ・西村次右衛門日記 豊橋史々料叢書 とよはしの歴史 …………… (平成8年 豊橋市)
- ・郷土豊橋を築いた先覚者たち …………… (昭和61年 豊橋市教育委員会)
- ・豊橋の史跡と文化財 …………… (昭和56年 豊橋市教育委員会)
- ・豊橋の自然発見 …………… (豊橋の自然発見編集委員会 豊橋市)
- ・たかし …………… (昭和58年 豊橋市立高師小学校)
- ・海道を行く一渥美半島の考古学…………… (豊橋市美術館)
- ・天伯原 …………… (平成7年 天伯原開拓50周年記念誌刊行委員会)
- ・竜巻の記録 …………… (平成11年9月 豊橋市)
- ・戦中の市民生活と戦後の歩み…………… (平成7年 豊橋市教育委員会)
- ・東海道五十三次宿場展 二川、吉田 …………… (二川宿本陣資料館)
- ・二川宿及び東海道に関する図書、研究資料…………… (二川宿本陣資料館)
- ・豊橋市史 第1巻～8巻 別巻…………… (昭和54年 豊橋市 豊橋市史編集委員会・編集)
- ・渥美郡史 …………… (大正12年 愛知県渥美郡役所愛知県渥美郡役所・編集)

- ・豊橋第18連隊…………… (歩兵第18連隊史)
- ・近世の交通と地方文化…………… (昭和61年 愛知大学総合郷土研究所)
- ・愛知県開拓史 戦後開拓地区誌編…………… (愛知県)
- ・愛知県の地名…………… (昭和56年 日本歴史地名大系28)
- ・東三河の戦国時代…………… (平成14年 鈴木 健・著)
- ・豊橋教育の源流…………… (明治、大正、戦前戦後 夏目定寛・編著)
- ・東海道二川宿の研究…………… (昭和56年 紅林太郎・著)
- ・三河路に消えた「いざ鎌倉」の古道…………… (浅野浩一・著)

## 資料提供

- 豊橋市 情報ひろば
- 二川宿本陣資料館
- 豊橋市中央図書館
- 本郷地区市民館 図書館
- 二川公民館
- 高師小学校
- ユニチカ(株)豊橋事業所
- 豊橋自然史博物館
- 南部土地改良
- JA 豊橋
- 愛知大学

## 編集後記

平成17年（2005）2月に各町内会の推薦により編集員が決まり校区史の編集を始めました。14回にわたり総代8名を含む各町内会推薦委員、豊橋市役所サポーター3名の17名による編集委員会を結成、さらに同委員会から、7名の執筆者小委員会を指名、数10回に及ぶ執筆、編集、校正が行われました。

寒い小雪まじりの寒風の日や大雨の中を集まって苦労の連続の日々でした。素人の集団が、一から始めた活動は、資料集めも写真の数だけでも8,000枚を超え、愛知大学の図書館の資料やユニチカ株式会社の貴重な資料提供もいただきました。また、校区の皆様の多くの資料提供やお話をいただき作成する事ができました。

ご提供いただいた資料は、素晴らしく、そして、貴重な資料ばかりであり、心より感謝申し上げますとともに、この機会に先輩諸氏がつくられた「高師風土記」を改版、作成する新たな活動につながることを期待します。

## 高師校区史編集委員

### ■編集委員名簿

編集委員長	久保田 正	（上野町総代）
執筆責任者	山本 四一	（浜道町総代）
執筆委員	渡会 甫	（高師本郷町総代）
	芳賀 学	（高師本郷町）
	高田 克明	（上野町）
	吉川 和志	（畑ヶ田町）
	鈴木 研一	（三本木町）
	彦坂 峰夫	（豊橋市役所サポーター高師本郷町）
	岩瀬 直司	（豊橋市サポーター浜道町）
	光部 啓一	（豊橋市サポーター三本木町）
編集委員	稲垣 豊光	（三本木町総代）
	嵯 宏行	（ユニチカ町総代）
	石橋 徳義	（松並町総代）
	尾藤 市之	（新西高師町総代）
	近藤 義弘	（畑ヶ田町総代）
副委員長	宮崎 祥	（浜道町）
会計	近藤 秀勝	（畑ヶ田町）

校区のあゆみ 高師

平成18年12月25日発行

編集 高師校区総代会  
高師校区史編集委員会  
発行 豊橋市総代会  
印刷 共和印刷株式会社

R2100  
古紙配合率100%の再生紙を  
使用しています。





